

実践的学習を取り入れた「乳児保育」についての試み — 学生の成果と課題 —

Consider incorporating practical learning about the "Baby Care"
— Achievements and challenges of student —

EMIKO NAGATA¹⁾ EIKO KIMURA²⁾ MIWA SANJIYO²⁾

はじめに

2012年度なりたい職業ランキングで将来女子が着きたい職業4位¹⁾となるほど保育士は人気の職業である。指定保育士養成施設でもある静岡英和学院大学（以後大学と記す）にも保育士資格取得を希望して入学してくる学生が多い。ところが、入学する学生の中には、乳児やその母親と関わった経験の少ない学生も多く、保育所での保育実習でも乳児との関わりに不安をみせている。

大学では、2011年6月より概ね月1回のペースで『学生による子育て支援広場あちよぼ』を開始した。地域の親子（主に3歳未満児と保護者）のための子育て支援の場として大学校内を解放した。

子どもと接する経験の少ない学生にとっては、この子育て広場の実践により、子どもの発達、保育内容、保育技術、地域の親子の生活を学ぶなど、保育実践で親子との関わりを通して、深く理解することができる経験の場となる。こうした大学での保育の実践的な学びの成果は、保育実習指導面から非常に評価されている²⁾。

したがって、乳児と関わる経験をもてる保育実践は、保育士養成課程の科目「乳児保育」でも学ぶべき課題でも学生の成果になるのではないかと考えらえた。

「乳児保育（演習2単位）」³⁾は、「保育の内容・方法に関する科目」として位置づけられる。「乳児保育」の教科課題として、「乳児保育の理念と歴史的変遷及び役割等について学ぶ」「保育所、乳児院等における乳児保育の現状と課題について理解する」「3歳未満児の発育・発達について学び、健やかな成長を支える3歳未満児の生活と遊びについて理解する」「乳児保育の計画を作成し、保育の内容や方法、環境構成や観察・記録等について学ぶ」「乳児保育における保護者や関係機関との連携について学ぶ」などが掲げられている。

しかしながら、「乳児保育」での保育実践での学生の学びの成果についてはまだ報告されていない。そこで、今回は、本学での子育て支援の取り組み『学生による子育て支援広場あちよぼ』での「乳児保育」の学びを鑑み、保育実践を通しての学生たちの学びの成果について考察を試みることにした。

本稿では、取り組みの期間を3か月間（2012年4月～2012年9月まで）とし、学生の取り組みの経過から、実践学習での「乳児保育」の内容を考えた学生の学習の成果について報告する。

1) 静岡英和学院大学

2) 社会福祉法人大原福祉会大原保育園

1. 実践的学習を取り入れた学習方法

今回は、以下のように実践学習を展開していくことにした。

1) 実践的学習の流れ

実践の方法として、まず、学生中心に大学での子育て支援広場を運営させることにした。そして、(図1参照) ①計画②準備③実践学習④振り返り⑤改善、そして、次回の実践(①に戻る)に生かすという学習の流れを学生に説明した。

実践のための学習方法として、『学生による子育て支援広場あちよぼ』を利用し、学習の流れを計画・準備、当日の保育実践、振り返りと改善で各1時間、の合計3時間の①～⑤(図1参照)とした。また、学習の時間配分(図1参照)として、それら一連の流れとし流れ全体を3回繰り返して、合計9時間を費やした。

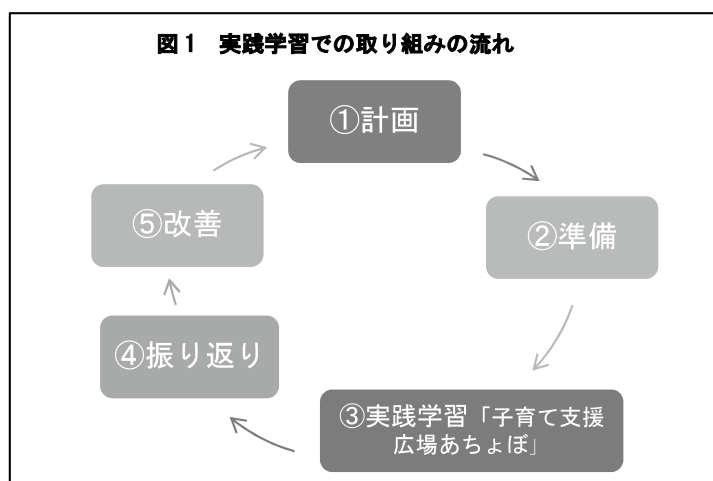


表1 学生の役割分担	
1 受付	保護者と子どもの受付担当(入場受付・出席シール)
2 制作	季節の制作物を親子と作る担当
3 遊具・玩具	親子遊び担当(遊具:滑り台、ボールプール、 玩具:車、ままごと・積み木・ブロック、乳児玩具)
4 駐車場	駐車場や大学内の案内
5 食券	食券販売・食堂内の案内

2) 学生の役割分担

「乳児保育」受講生として実践に取り組む学生は、41人（1年生11人、2年生27人3年生3人）。担当コーナーを5種類（表1参照）に分け、さらに遊具（滑り台、ボールプール）、玩具（車、ままごと・積み木・ブロック、乳児玩具）に担当パートを細分化し担当させた。

2. 実践からの学生の学び

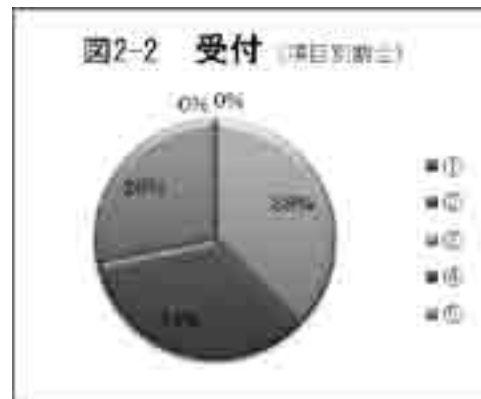
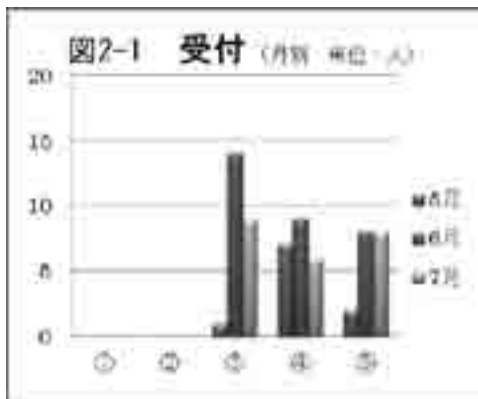
ここでは、各担当コーナー別に「乳児保育」の内容をつの5項目（①乳児保育の理念と役割、②乳児保育の現状と課題、③3歳未満児の発達と保育内容、④乳児保育の実際、⑤乳児保育における連携）とし、学生の記述からどの位網羅したかについて、保育実践日を月別3回（5月〈5月28日〉、6月〈6月25日〉、7月〈7月23日〉）と、「乳児保育」の課題5項目を学生の担当別に表（表2～9、図2-1～9-2）にした。また、項目別の内容は、学生の記録から5月、6月、7月を月別に3回、課題を5項目に分け「学生の振り返りと考察」に記述した。

1) 受付担当

表2 学生の気づき（受付：担当者6人）

※複数回答あり

受付	①乳児保育の 理念と役割	②乳児保育の 現状と課題	③未満児の発 達と保育内容	④乳児保育の 実際	⑤乳児保育に おける連携
5月	0	0	1	7	2
6月	0	0	14	9	8
7月	0	0	9	6	8
合計(人)N=64	0	0	24	22	18

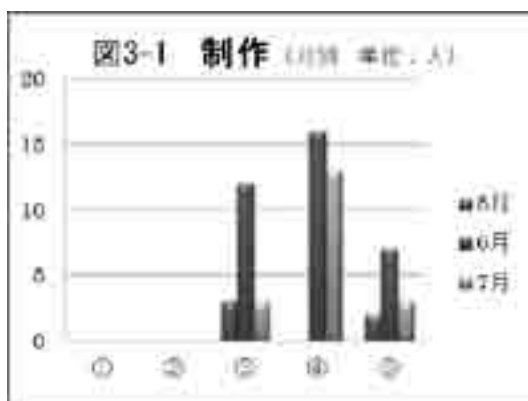


2) 制作担当

表3 学生の気づき (制作：担当者7人)

※複数回答あり

制作	①乳児保育の 理念と役割	②乳児保育の 現状と課題	③未満児の発 達と保育内容	④乳児保育の 実際	⑤乳児保育に おける連携
5月	0	0	3	0	2
6月	0	0	12	16	7
7月	0	0	3	13	3
合計(人)N=59	0	0	18	29	12

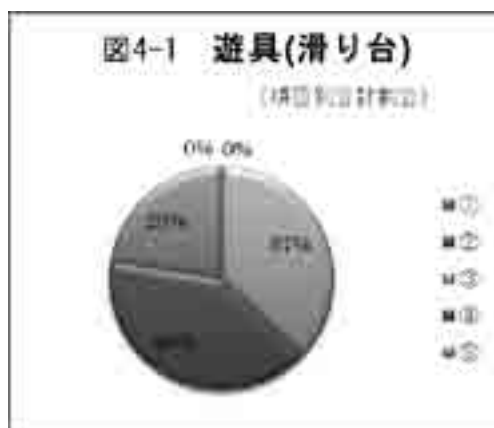
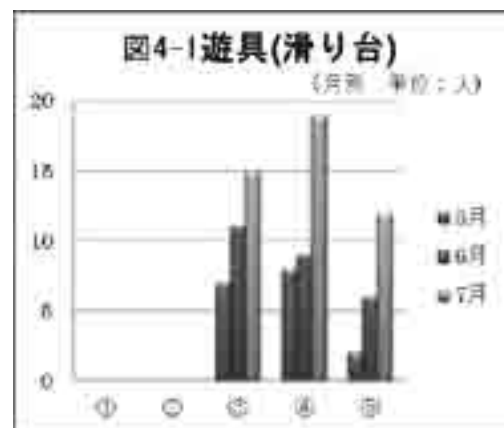


3) 遊具 (滑り台) 担当

表4 学生の気づき 遊具(滑り台：担当者4人)

※複数回答あり

遊具 (滑り台)	①乳児保育の 理念と役割	②乳児保育の 現状と課題	③未満児の発 達と保育内容	④乳児保育の 実際	⑤乳児保育に おける連携
5月	0	0	7	8	2
6月	0	0	11	9	6
7月	0	0	15	19	12
合計(人)N=86	0	0	33	36	20

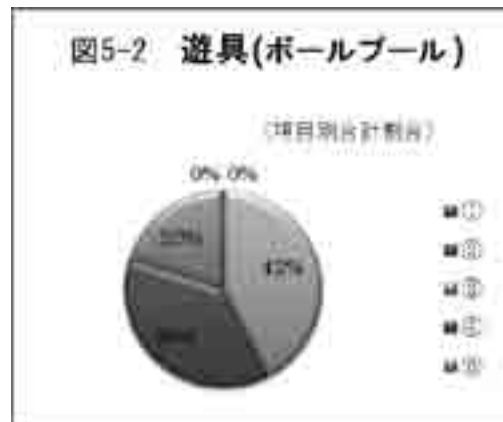
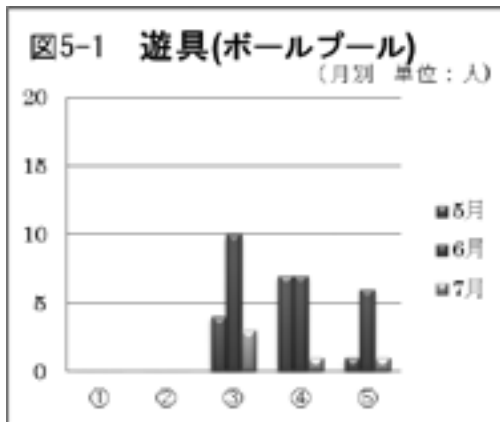


4) 遊具（ボールプール）担当

表5 学生の気づき 遊具(ボールプール：担当者3人)

※複数回答あり

遊具 (ボールプール)	①乳児保育の 理念と役割	②乳児保育の 現状と課題	③未満児の発 達と保育内容	④乳児保育の 実際	⑤乳児保育に おける連携
5月	0	0	4	7	1
6月	0	0	10	7	6
7月	0	0	3	1	1
合計(人)N=40	0	0	17	15	8

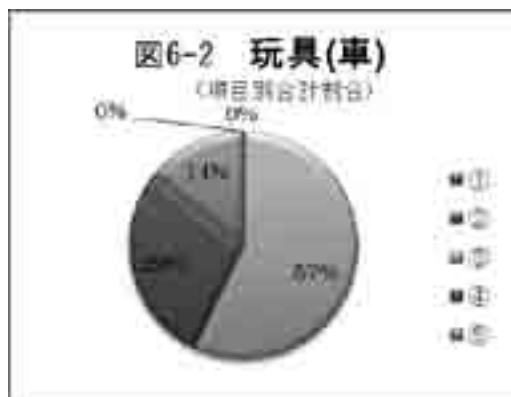
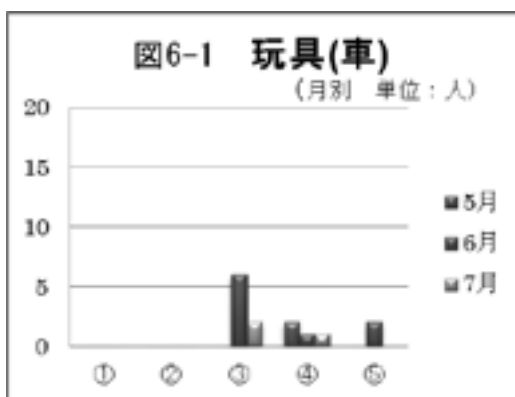


5) 玩具（車）担当

表6 学生の気づき 玩具(車：担当者3人)

※複数回答あり

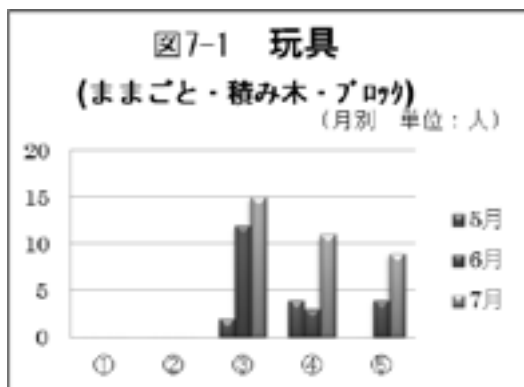
玩具 (車)	①乳児保育の 理念と役割	②乳児保育の 現状と課題	③未満児の発 達と保育内容	④乳児保育の 実際	⑤乳児保育に おける連携
5月	0	0	0	2	0
6月	0	0	6	1	2
7月	0	0	2	1	0
合計(人)N=14	0	0	8	4	2



6) 玩具（ままごと・積み木・ブロック）担当

表7 学生の気づき 玩具(ままごと・積み木・ブロック:担当者5人) ※複数回答あり

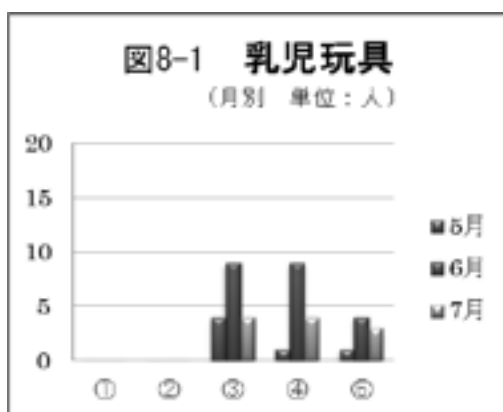
玩具 (ままごと・積み木・ブロック)	①乳児保育の 理念と役割	②乳児保育の 現状と課題	③未満児の発 達と保育内容	④乳児保育の 実際	⑤乳児保育に おける連携
5月	0	0	2	4	0
6月	0	0	12	3	4
7月	0	0	15	11	9
合計(人)N=60	0	0	29	18	13



7) 玩具（乳児玩具）担当

表8 学生の気づき 乳児玩具:担当者5人 ※複数回答あり

乳児玩具	①乳児保育の 理念と役割	②乳児保育の 現状と課題	③未満児の発 達と保育内容	④乳児保育の 実際	⑤乳児保育に おける連携
5月	0	0	4	1	1
6月	0	0	9	9	4
7月	0	0	4	4	3
合計(人)N=39	0	0	17	14	8

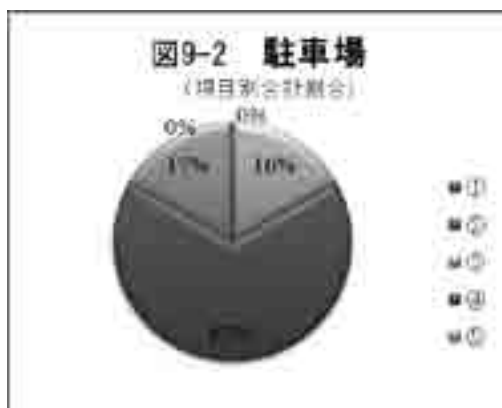
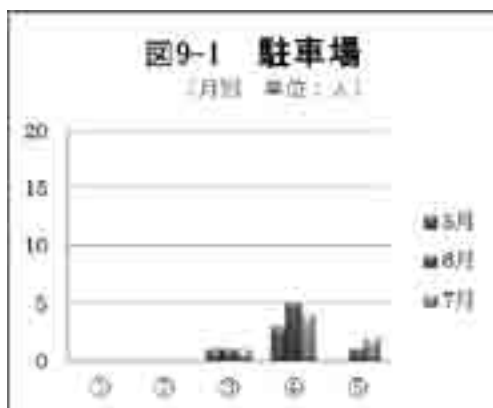


8) 駐車場担当

表9 学生の気づき 駐車場：担当者4人

※複数回答あり

駐車場	①乳児保育の 理念と役割	②乳児保育の 現状と課題	③未満児の発 達と保育内容	④乳児保育の 実際	⑤乳児保育に おける連携
5月	0	0	1	3	0
6月	0	0	1	5	1
7月	0	0	1	4	2
合計(人)N=18	0	0	3	12	3

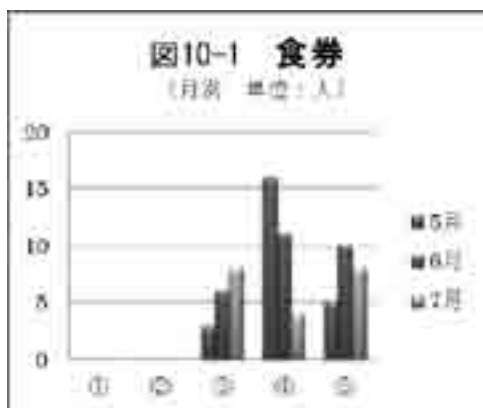


9) 食券（売り場）担当

表10 学生の気づき 食券売場：担当者4人

※複数回答あり

食券売場	①乳児保育の 理念と役割	②乳児保育の 現状と課題	③未満児の発 達と保育内容	④乳児保育の 実際	⑤乳児保育に おける連携
5月	0	0	3	16	5
6月	0	0	6	11	10
7月	0	0	8	4	8
合計(人)N=71	0	0	17	31	23



3. 学生の振り返りと考察

ここでは、実践学習を通しての5月～7月の学生の担当パート別の振り返りの記録の気づき（抜粋）から「乳児保育」で学ぶべき5つの項目（①乳児保育の理念と役割、②乳児保育の現状と課題、③3歳未満児の発達と保育内容、④乳児保育の実践、⑤乳児保育における連携）に分類し考察していくことにする。

なお、項目の①乳児保育の理念と役割、②乳児保育の現状と課題の内容については、第1～2回目の授業内で、実践する目的を説明する中で、参画する楽しさとその意義や乳児の保育に必要な理念や乳児保育に携わる役割、現在の乳児保育のニーズや課題について講義した。また、実際に学生からも5月～7月の段階での気づきは見られなかった(表1～10図1～10参照)。以下、5月～7月の各担当場所（制作、遊具、玩具、駐車場、食券）についても同様の項目を省略した。

1) 受付

(1) 5月

保育内容を実践していくということ（③3歳未満児の発達と保育内容）

「受付担当であっても空いた時間に、催しもので楽しむ子どもたちの足元に散らかしたままの玩具を片づけ、子どもが遊びに集中できるように配慮したり、子どもと一緒に歌いながら手遊びをしたりすることで、その空間にいるたち人に楽しい空気を作り出せることに気づいた」

受付担当者は、初めは保育の内容と関わる担当ではないと考えていたようだ。しかし、「受付担当であっても子育ての支援者としてみんなで会を作っている仲間」ということに自ら気づき、他の担当が手薄になった場所に関わり始めた。「受付は立ってそこにいるだけ」といった考えに変化があった。彼女は、「保育の内容を動かしている仲間の1人という意識が生まれ、非常にうれしかった」という。学生は、保育内容の理解ができ、保育実践の場で役立っている実感を味わった。

振り返りで自己評価を見直す（④乳児保育の実践）

「初めて受付を担当、来場者が記述する書類（写真1参照）が多く、当日のための傷害保険料の説明をするなど、保護者に理解してもらうことが多く戸惑い、緊張した」

子育て支援の場では、保育所のように毎日来場するばかりではないため、来場時、受付の書類をかいってもらうことも多い。様々な説明を通して、親子に関わっていく必要もある。初めての経験で、学生は戸惑い緊張したようである。実践後の振り返りはグループでも行った。この振り返りで他学生が同じような気持ちになったことを知り、安心したようだ。

「保護者が書類に記入している最中、子どもと積極的に関わるができなかった。受付書類の記述をお願いするなどの手順の順番が悪く、対応に時間がかかり、保護者を不安にさせてしまった。保護者ともうまく関わるができなかった」

この学生は、初回の実践で保護者に説明することだけに気持ちがいってしまったため、親子とのコミュニケーション不足を感じている。実際にこのように「～できなかった。」と否定的に評価し、段階的に学ぶことを考える余裕のない学生がいるため、1つでも達成したことに目を向けさせる配慮をすることが必要である。

先輩や他学生の取り組みから学ぶ（⑤乳児保育における連携）

「恥ずかしさもあり、はっきりとわかりやすい声を出すことができず説明がうまくいかなかった。困って先輩に助けを求めてしまった。先輩たちは対応できない急な問題が発生した時も、慌てずすぐに対応し、保護者が安心して様子が見られた。私も対応の仕方を的確に指示をしてくれたため安堵した。自分の担当しているところで精一杯になっている人がいる一方、他のところまで気を配っている人がいたことに気づいた」

ここでは、先輩との連携の大切さを学んだようだ。先輩の「慌てない対応」に保護者が安堵したこともしっかり見ていたようである。また、自分は担当で手一杯になっている一方、壁面構成の剥がれを修繕している他者の様子も見てとれたようだ。



写真1 受付準備（書類の仕分け）



写真2 制作（7月アクアリウム）



写真3 経過の発表（振り返り）

（2）6月

保護者から子どもとの関わりを学ぶ（③3歳未満児の発達と保育内容）

「子どもがころんで泣いていても、手をついて自分で起き上がるまで見守っている保護者が多く、すぐ手助けするのではなく、子どもが自身で気持ちの立て直しをするための時間をもつことを見守ることを学んだ。催しがはじまる際、子どもに『はじまるよ』と分かりやすく声をかけることや、子どもの中に入り、子どもの興味を引き出すような遊びへの導入を積極的に取ることができず焦った」

保護者と子どもとの関わりを目の当たりにすることがある。目の前でころんだ1歳児に、学生は、どのように援助をしてよいかわかった。そばには子どもの母親がいたが、すぐ手を差し伸べるのではなく、子どもの様子を見守っている姿を見つけたことができたようで、親子の関わりから見守る援助方法を学んだようだ。

子育て支援に必要な受付の役割（④乳児保育の実際）

「前回、出席カードが足りなくなって困ったため、今回は事前準備をした。3人担当で、だんだん混んできて、また、プリント、名札、出席カードなど、徐々になくなってしまい、混乱し、焦った。先輩担当者から、受付の方法と注意点を教えてもらい、ホッとした。実践終了後、夢に出てきたほどだった。楽しくて興奮した」

子育て支援の現場でも受付には様々な書類があり、手順や注意事項の伝達、保護者対応など様々な役割がある。具体的にその対応の仕方を学んでいる。先輩の援助の方法を知り、また、その楽しかった興奮が夢にまで出てきたという。

2回目の目標と協力体制（⑤乳児保育における連携）

「2回目の受付担当では、説明が簡単でわかりやすく要点をまとめて話すことに挑戦したが難しかった。受付時間を長くとらせてしまうことが多く、突然の保護者からの質問の対応に困った。10時過ぎたところの入場者のピーク時は本当に忙しかった。とにかく説明を間違えないように努力した。当日の流れを変更することもあったが、グループの中で協力しこなした。とくに、自分勝手に判断せず、学生同士が協力することで、スムーズにいくということが分かった」

「要点をまとめて話す」を2回目の目標にしたが、保護者に伝えるという行為自体に慣れていないことと、質問に答えられなかったことでさらに緊張した。「要点をまとめて話すことより、間違えないで伝えること」が当日の目標になった。学生自身が、目標の設定の持ち方を考えたようだ。また、自分勝手な判断をしないで、学生の中で考え協力することの大切さにも気づいた。

「保護者に『子どもたちを沢山の学生が対応してくれるので、安心して遊ばせられる』とってもらった。頼られた感がうれしかった。受付が終盤になった時に来場した親子がいた。息子の誕生日らしく、誕生会に間に合ってとても喜んでいて。そういう行事があるから行こうと思ってくれることがうれしいことだと思った」

保護者のことばと誕生会のエピソードによって学生の気持ちの変化がみられた。この学生は、今回の関わりで「うれしい」と関わる楽しさが感じられたようである。

（3）7月

子どもの楽しめる遊びで関わること（③3歳未満児の発達と保育内容）

「前回と同様、手続きの一連の流れを覚えていたのですぐに対応できた。受付で保護者が手続きしている間に子どもと『いないいないばあ』などをして積極的に関わった。そうすると子どもがとても喜んでくれた。子どもと関わる機会がもてる」

受付で保護者の書類記入時、学生とちょうど目が合った子どもに「いないいないばあ」をした。7か月になる子どもで、ちょうどその遊びの楽しさを感じたようである。喜んでくれた子どもをみて学生は、さらに関わりたくなった。

担当者間の交流の大切さ・具体的な支援方法（④乳児保育の実際）

「3回目の受付担当。今までの反省を活かし、配布物の数を確認し、予備があるかどうかを事前に確認するようになった。待つ人数が多くなったときには、他の担当コーナーからフォローが来てくれるようになり効率性が増した。チームワークが取れるようになっていったと思う。時間を見つけ輪の中に入れば、親子に接する機会ができるのだと思った。すべては自分の思いと行動次第だと気づいた」

時間と親子の来場によって人数の変動があり、担当者が必要な場と必要のない場ができる。そんな時は、素早く他の担当者が動いてそこをフォローしなくてはならない。担当者間で行き来しながら交流する大切さを理解したようである。また、交流する時間を自分で捻出する大切さも感じたようだ。

「記入してもらうために置いてある鉛筆で子どもが遊んでしまった。先がとがっていて危険もあることに気づいたため、子どもの手の届かないところに置き保護者に直接手渡すことにした。身近な危険に注意をすることが大切だと思った」

普段そこにある鉛筆が子どもには危険につながることもある。身近な危険とその対応方法に気づいた。

「子どもがぐずってしまった時の対応、①子どもとコミュニケーションを取りながら出席カードにシールを貼るようにすること、②優しい笑顔で接すること、③子どもの目を引く小さいぬいぐるみなども置いておく。ぐずってしまったときは、気を紛らわすためにもあると良い。④お母さんと挨拶をするが、子どもにも挨拶をすることが大切。そうすることで、子どもとの関係ができてきたようだ」

この学生は、子どものぐずった際の具体的な対応の方法を考えた。さらに、母親だけでなく子どもにも挨拶することで、子どもとも関係ができてくることを感じたようであった。

「受付で、子どもを抱っこした。ここでしか楽しめない学生との関わりの大切さ、身近さを感じてもらうことだと思う。暑い日だったため、子どもたちの汗を見て、いつの間にか、子どもを抱き上げカードをうちわとして扇いでしまった。それを見て、母親は『ありがとう』と言ってくれた」

7月の受付で汗をかいた子どもの様子をみて、思わずカードで子どもを扇いでしまった。学生はその行動がよいのか悪いのか戸惑っていたようだ。しかし、それを見た母親が言葉をくれたことがうれしかったため、エピソードの記録として残した。

「3回目、保護者に短時間で大まかに説明できるようになった。また、ある程度の質問は答えられるようになった。振り返ると、早口に勢いで話してしまう点は改善すべきと思った。保護者が記入している間に、子どもが飽きてしまわないようにシールを見せて話しかけることも忘れない。子どもが入口自動ドアに挟まってしまわないように目を配ること。子どもに何があってもすぐ動けるようにする、など大切だと分かった」

一通りの受付でも説明ができるようになり、やっと早口の癖を改善することを考えられるようになった。受付の横を素通りしてエレベーターに行ってしまう子どもの危険な様子もみられる余

裕がでてきた。

親子の愛着の理解と配慮する点（⑤乳児保育における連携）

「『トイレに行きたいから少しの間、赤ちゃんを見ていて』と母親から頼まれた。赤ちゃんは大泣きになり、学生たちの誰があやしても泣き止まなかった。しかし、お母さんが戻ってきてだっこしてもらった途端、すぐに泣き止んだ。お母さんってやっぱりすごいなと感じた」

母親は何気なく学生に「ちょっとの間、子どもを見ていて欲しい」と頼んだと思う。しかし、子どもに大泣きされ戸惑う様子がうかがえた。母親への子どもの愛着を肌で感じたようだ。

「親子と関わる時に必要な配慮は、積極的に子どもに話しかけることが重要である。子どもは、初めて会う学生を警戒しているが、心を開いてくれるようにこちらから笑顔で楽しそうに話しかけること、とくに、親が受付をしている際は子どもと関わる。その時の言葉遣いに注意する。学生が言葉に気を付けないと失礼であり、また子どもが真似をする。そういった配慮が大切だと思う」

初めて会う子どもとの関わり方と、親へ言葉遣いの注意する点に気づいた。そうしないと子どもが真似するかもしれないことまで気にかけている。

2) 制作

（1）5月（葉っぱのカード作り）

毎回の目標を実践に繋げる（③3歳未満児の発達と保育内容）

「制作コーナーで、今回、一人の子どもの行動に注目し実践した。2歳くらいの男児で、まだ話ができなかった。子どもは、眠いらしく床でゴロゴロしていたが、滑り台で興味を持ったためなのか、ヨチヨチ歩いて滑り台に登り始めた。しばらくすると飽きたようで、制作コーナーに戻ってきた。子どもの遊び発達と動きをみることができた」

初めての制作担当のため、一人の子どもの行動に注目すること目的とした。そうすることで、保育の流れと具体子どもの動き、子どもの発達段階、遊びの発達などが具体的にみられるようになった。

学生配置とその動きの重要性（④乳児保育の実践）

「学生たちが、特定の子どものところに集中してしまうのはよくない。また、何をしてもよくわからないで佇んでいる学生への声掛けは、学生同士でできるようになればよいと思った。しかし、自分自身が周りのことだけで手一杯になってしまいその余裕がなかった。作業を分担するだけではなく、グループ各員が周りのことに気が付いて動けるような雰囲気グループの中で作れるようになることが大切だと感じた」

学生と積極的に関わる子どもがいる場合、数人の学生が集中して遊ぶ姿がよくある。それについて気づいたようだ。学生たち同志で声かけして必要な支援をしたいと感じているが、まだ制作の担当部分で余裕はなかったとの気持ちを感じている。学生の動きの重要性に気づいている。

「コーナーに来る人が少なかった時間、呼び込みをするために、子どもが興味をもてるアニメのキャラクターを描いた。コーナーの案内をマイクで行ったが、声に抑揚がなく良くなかった。楽しい雰囲気にならなかったと思う。情報伝達の放送だけであっても、相手へ話しかけるつもりで声を出す必要があることに気づいた。次回の課題になった」

制作コーナーは、入口から遠く、滑り台やボールプールなどと反対側にあるため、コーナーのあることに気づいてもらうために連絡放送を行った。そのプラカードには、子どもの好むキャラクターを描き興味をそそるようにすることや、呼び込みの言葉に対しても楽しい雰囲気が出せる必要性にも気づいた。

保護者と関わる際の言葉のかけ方（⑤乳児保育における連携）

「クレヨンを使用する際、机を汚すことを気にかけてくれた保護者がいた。遠慮から活動に支障が出てはいけないと思った。机を新聞紙で覆うなどするとよいと考えた。また、保護者との会話の際に、子どもの年齢のことをきっかけにした。ほとんど歩けなかった子どもを見て、「1歳ですか」と声をかけたが、実際は1歳3か月だった。先入観から予測をしたとしても、質問の仕方によっては保護者の敏感な気持ちの部分を刺激してしまう可能性があった、質問の仕方に気をつける必要があったと感じた」

子どもがクレヨンを使用する際に保護者が汚れない工夫をした。それに気づいた学生が、保護者から環境づくりを学んだ。また、保護者への関わり方、声掛けにも気をつけることも知った。

（2）6月（ペットボトル〈梅雨時期の動物〉で制作し水たまりの池で遊ぶ）

季節感を取り入れた保育内容（③3歳未満児の発達と保育内容）

「梅雨の季節を考え、子ども自身で描いた魚を水たまりに浮かばせて楽しむ遊びを行った。注意したのは、水たまりの絵の上で遊ばせる時、子ども同士が近づきすぎてぶつからないよう距離を見守ることだった」

梅雨の季節を取り入れた保育内容を考えた取り組みで楽しんだ。その中でも子どもの年齢が低い場合は自分の遊びに夢中になり子ども同士が近づきすぎて接触することもあった。学生は子どもたち楽しめる遊びの環境を大切に考えた。

保育内容とその援助のための配慮（④乳児保育の実際）

「梅雨の季節ならではの『水たまり』などをイメージした制作コーナーでの遊びが展開された。制作コーナーへ来てくれる予想以上に親子が多かった。そのため、コーナーで準備したものが足りなくなり、ペットボトルに入れる制作物『かえる・魚・かたつむり』の紙が切れてしまった。しかし、みんなで新しい企画を立てて臨機応変に手元にあった白い紙を利用し、その場を切り抜けることができた」

前回学生たちは、呼び込みで苦労したが、今回は、うれしいことに制作コーナーに遊びに来て

くれる親子が多かった。はじめて、予測できなかった部品が足りなくなるという経験をした。そして、その解決策としてグループで新しい企画を考え、「白い紙に子どもたちが好きな絵を描く」という遊びを取り入れた。学生達で試行錯誤して臨機応変な対応をする経験ができたといえる。「クレヨンを口に入れるなど、事故が起きてから慌てるのではなく、事前に用具の安全性などを確かめておくように教員から助言を受けた。事故の原因は多くが親や学生が目を離したことから起こる。私たち学生も子育てをすることは子どもに常時目を離せないということを改めて自覚しなければならないと思う。母親からは「家ではよくあること」と言われてもチョットした不注意が危険である。保育者として事態を適切に捉える確固とした尺度、視点を持つ必要があると思った。気を引き締めて子どもと接していかなければならないと思った」

事故を未然に防ぐための配慮の仕方とそれまでの対応について学生が学んだ。保護者と保育者の視点の違いを見つけ、さらに、保育者の卵としての自覚も目覚めてきたようだ。

「親子に制作物のペットボトルの玩具の上蓋をテープで留める援助をした。テープで留めたものが途中で取れないようにしないと、中身が飛び出してしまうため危険である。手作り玩具は持ち帰ってもらうが、ペットボトルの蓋は子どもが誤飲することがあるので取扱に注意を促した。親子制作の援助方法に対する難しさを実感した」

ここでは、具体的な親子との制作の援助の方法について記述している。誤飲という危険と制作方法の保護者に伝え方の困難さを感じた。

「子どもに3種類のデザインの中から好きなものを選んで、クレヨンで自由に描いてもらった。自分では書けない子どもは母親と一緒に手を添えて描くことを促す。自分で描いた子どもも、親に描いた子どもも、ペットボトルを持つと楽しそうな様子をみせ遊んでいた。年齢の低い子どもは、ペットボトルを転がしたり投げたりして遊んでいた」

この学生は、「好きなものを選んで描く」という課題を親子に示すことが説明しやすいことを知った。また、年齢の低い子どもの遊び方にも目を向けている。ペットボトルの魚を池で泳がせる遊びのつもりが、投げたり転がしたりして楽しむことが見て取れたようだ。

「2回目の実践で前回学んだため、進め方手順の理解ができていた。留意した点は、子どもが自由に絵を描けるように学生はあまり指示することばをしないように支援すること。子どもと接する際には、子どもだけでなく母親にも積極的に話をしていくこと」

2回目の実践で「子どもが自由に描く」+「できるだけ学生は指示しないこと」と課題と援助方法の両方に気づいている。また、子どもだけでなく保護者にも話しかけをすることも大切だと理解した。

保護者とのコミュニケーションの実感（⑤乳児保育における連携）

「『ペットボトルを魚やカタツムリにみなして、お池で泳がせて遊ばせる発想がとても面白いね』と母親から褒められた。『おうちでもおふろでも利用して遊べますよ』と母親に伝えると、『それでは、家でも使いますね』とうれしそうに言われた。コミュニケーションが取れたと実感した」

保護者と制作物を媒介にして、積極的にやり取りができるようになった。「家でも使える手作りの玩具」という言葉かけの配慮は、実践の場と家の両方をつなぐ大切な言葉である。「親とのコミュニケーションが取れた」という、うれしい実感を味わっている。

(3) 7月（ペットボトルでアクアリウム作り）

保護者とのやり取りから子どもの様子を聴く（③3歳未満児の発達と保育内容）

「こちらから話しかけないと、子どもから話しかけてくることはほとんどない。子どもだけでなく親にも話をする事で、子どもの様子や情報を聞き入れることができた。一人一人の対応を変えられることができると、子どもにとって一番楽しい援助の方法を知ることができると分かった」

関わり方の基本「自分から子どもに話しかける」この大切さに気づいた。大人との関わりであると、相手からの言葉の発信を待つことがあるが、子どもには通用しないのであった。保護者に話すことで情報が伝わり、より子どもにあった援助の方法を知ることができると気づいた。

充実した関わりの追及（④乳児保育の実際）

「制作コーナーを担当する学生数が急激に減った時間（授業の関係で途中退場する場合がある）、事前の準備はしていた。また、事前話し合いで『蓋がとれやすい』と問題が出ていたが、みんなで修繕したことで、当日不自由なく行えた。しかし、シールを台紙からはがす作業に手間取り時間がかかったため、参加親子とゆっくりと話をする時間が取れなかったことを残念に思った」

制作担当者の人数が減った場合の対応はグループで話し合っていた。しかし制作過程で改善した部分以外のところで手間取ることがあり、親子と話す時間が取れなかったことが残念だった、と思ったようだ。臨機応変に対応することの1例として学んだ。

「事前に長期の準備期間があったので、いろいろと試行錯誤することができた。また、その日に備えて体調を自己管理することも話し合っていた。しかし、制作コーナーの場所を移動したため、参加者の流れがいつもと違い、手順に戸惑ってしまった。これまで通りの位置のほうが落ち着いて制作に取り込めるのではないかと思った。ただ空いている場を活用するだけでなく、参加者が興味を持って構内へ来てもらえる方に、グループでのガイダンスの工夫ができればよいと思った」

事前準備の1つとして、体調管理を学んだ。また、制作コーナーの配置の変更で戸惑ったようだ。親子に興味をもってもらう環境設定の工夫の仕方について気づいた。

「今回グループ内で役割分担し、お互いフォローできるように話し合った（写真2参照）。①問題点に気づいたらすぐにリーダーに相談し早い対応ができるようすること。②前回の子どもの行動から、教具の安全を確認した。必要な材料が無くなった場合、誰でもすぐわかるように材料を小分けして保管する。子どもの発達と親の興味に注目し、親子支援の場として、親子と一緒に楽しく遊べるようにすることも忘れない」

グループ内での役割分担を明確にし、お互いにフォローし合うことを学んだ。そのための具体的な3点についてもグループで共通理解した。

「制作コーナーで途中シールが足りなくなりそうだったので、急遽みんなで作った。花の形、桜の形、クマの形、星の形、ハートの形など、色の種類も増やしたため、子どもたちには好評だった。男児は水色、女児はピンクのペットボトルを選ぶことが多いなと思った。動かしたり転がしたりして遊ぶとキラキラして子どもたちはとても喜んでいて、1人の子どもが途中で制作に飽きた時、先輩たちが自由に絵を描けるように真っ白な紙を用意してくれていた。ポスカが水性なので、ペットボトルに描くとすぐ手についてしまうことが分かった。準備時に試しておくことが必要だと気づいた」

急遽作った制作の部品にも子どもの興味の色彩があることに気づいた。男児は水色を好み、女児はピンク色を好む傾向があった。また、全体の子どもがキラキラするに喜ぶという。材料として用意したポスカ（色マジック）が水性だったため描く途中で手についてしまった。事前の試しが必要であったことに気づいた。

親子の好む制作物の検討（⑤乳児保育における連携）

「親子で制作した制作物が、持って帰ってもらえなかったのは、持ち帰るには手にあまる大きさだったことや、子どもが制作する部分が少なく、親子のものという意識が少なかったことが原因だと思う。せっかくの作成物を持って帰ってもらえなかったことが残念だった。制作物の内容について再度検討することが必要だと思った」

親子に制作物を持ち帰って家でも遊んでもらうことを目的の1つとしていたこともあって、制作物を持ち帰らない親子をみて学生たちは残念に思った。実践と家庭を結ぶ遊びを考えていた学生たちは制作の内容について検討し改善する必要があることに気づいた。

「制作について改善する点として、親子の参加数と担当者数を把握する。学生の人数が足りないと分かったなら他のコーナーからサポートしてもらうこと。人数が少ない場合にその場の机の数を減らすなど、コーナー縮小をすることを考えることも必要であった。また、荷物を預かるなどの対応が大切。子連れだと荷物が多くなりがちで置き場の確保が必要だった」

参加者と担当学生の人数の調整について気づいた。遊びの支援をする学生の人数では足りない場合に、他コーナー担当者との連携をして制作コーナー自体を拡大・縮小ができると理解できた。また、荷物を預かるスペースの必要性についてもグループの検討事項として挙げている。

3) 遊具（滑り台、ボールプール）

(1) 5月

子どもの好む遊びの傾向を発見（③3歳未満児の発達と保育内容）

「カラフルなプラスチックの滑り台を担当した。木の滑り台（写真4参照）よりも子どもに人気があるような気がして、色が明るい方が子どもの気を引くのかなと感じた。滑り台の上まで登ったが、滑り台から降りることができない子どもがいた。その時、自分ではどうしたいのかと子どもに聞くことや、子どもをどう援助すべきか考えることが難しかった」

2種類の滑り台がある。素朴な木製の滑り台と、カラフルな少し大きめのプラスチック製の滑り台。いつもカラフルな滑り台は人気があった。それは色や形が子どもの興味を引くのではないかと学生は考えている。初めての関わりだったこともあり、滑り台から下りられない子どもの援助方法について難しさを味わったようだ。

「積み木を両手にもってカツカツと叩いていた。子どもは工夫して遊んでいるようにみえ、子どもの発想力のすごさを知った。個々をみていかないと関われないと感じた。発達年齢にあった遊びを理解したいと思った」

積み木の遊び方は積み木を並べたり、積んだり、という遊び方の概念をもっていたようだ。しかし、両手で打ち合わせている子どもの遊びをみて発想力と思った。遊びには様々な年齢発達が関係していることを理解したようだ。

「ブロックで遊び中、子どもとのコミュニケーションが単調になってしまった。子どもが喜んでくれた反応でも、何度も繰り返すことで飽きられてしまったと思った。上級生の援助方法を見て学ぶことが大切だった。また、子どもが遊びの中でどのように感じて遊んでいるのか理解できるようにしっかり観察と考察をすることが大切だと感じた」

学生自身がブロックで組み立てる行為に熱中してしまい、子どもと関わることを忘れてしまった。子どもがいることを思い出して、子どもに声をかけたが、褒めることのみ何度も繰り返す結果になり、単調な関わりになってしまったと感じている。こういった学生の様子を多くみかけた。しかし、コミュニケーションがうまく子どもとのやり取りがスムーズなのを目の当たりにして刺激されたようだ。

先輩やグループとの協同（④乳児保育の実際）

「今回は、滑り台担当が初回なので緊張したが、できるだけ積極的に笑顔で親子に声をかけることにした。少しずつその場の雰囲気になれることができてきた。先輩がしっかり子どもとの関わり方を助言してくれたので、同じ様にやってみた。3年生の先輩の大きさを感じた」

ここでは、先輩が子どもとの関わり方を助言してくれたため、親子と接することができた。先輩との関係づくりの大切さも学んでいる。

「行事の内容を実行するために、学生たちが遊具だけでなく様々な担当グループに入り、それぞれ同時に進行していくことを知った」

行事を開催することは、様々な担当者が様々な動き、様々な活動を同時進行していかなければならないことに気づいた。

「会場準備の段階で、初めて実践で使用する様々な遊具や玩具を見た。準備が完成した時、こんな広い施設で開催するものかとうれしく思った。また、親子が楽しめる催しもの（人形劇）などを立案する必要があることを学んだ」

初めて参加する学生は、催しのためにどんな会場の事前準備が必要なのか、またどんな遊具や玩具が必要なのか、どんな保育内容が必要なのか分からない。しかし、実際に事前準備やり

ハースルの段階から参加したことで、大まかな全体の流れが理解できた。スケールの大きさとそこに参加できることに喜びを感じたようだ。

「滑り台担当グループは、子どもと保育者が来る前の準備の時間に、子どもの人数によって関わる必要があるかも知れないため、みんなで積み木の見本を組み立てて子どもとの関わりをロールプレイングした。子どもの遊ぶスペースでの配慮として、最初に全員で玩具遊具の消毒・コーナー全体の掃除をすることと学んだ。グループで時間を無駄にせず、準備ができたと感じた」

制作グループみんなで積み木の担当になった場合の子どもとの関わりをロールプレイングしている。遊び方にマニュアルがある訳でないが、実際に急に担当することも想定して動けるようになった。玩具や教具、室内、床などの消毒を参加者全員で行う必要性も子どものためだと理解した。

「今回の取り組みを経験し、計画、準備、実践、片づけの方法など一連の流れが理解できた。事前に先輩に『親子とお話しして、コミュニケーションを取ることが大切ですよ』と聞いていたが、何を話していいかわからず、ほとんど話すことができなかった。振り返りの時間に助言をもらいたい」

第1回目で、一連の流れの把握はできた。次は、今回の目標としては、先輩からの言葉「親とのコミュニケーション」しかし、コミュニケーションの取りかかりが分からず、混乱した。振り返りで先輩からの助言をもらう必要があることに気づいた。

「『滑り台から落ちてしまうのではないかと、両手に力を入れて支えていると、そっと子どもの背中に手をまわして、必要な時に応じて援助するほうがいいと助言を受けた。危険ばかり気をまわしすぎたと反省し、子どもたちが『どんな気持ちで遊んでいるのか』を考え援助するようにした」

子どもの危険ばかり気にしてがっかりと子どもを支えすぎ子どもが動きにくくなった。そして、支援者側の学生も楽しめる余裕がもてなかった。しかし、先輩の助言から子どもの気持ちを共有し、関わることの大切さに気づいたようだ。

「ボールプール（写真5参照）を担当して、最初とても人気があって人数が多く、入れ替わり立ち代わりで、色々な子どもが入ってきた。一人で遊んでいる子ども、遊びに入れない子どももいた。幼い子どもを中心に、積極的に関わることにした。ボールプールに入ろうか迷っている子どもに声をかけ、入りやすい、遊びやすい環境を考えた。子どもたちの笑顔を見ていたら、疲れも吹っ飛んで楽しかった」

子どもに人気のあるボールプール。しかし、子どもの中には、ボールプールの中で遊ぶ子どもたちの動きや声に圧倒されて入ることができない子どももいることに気づいた。また、支援した学生は、子どもたちとの関わりで楽しさも感じたようだ。

「今回もボールプールは人気があった。そのため、余計に責任感や協調性の大切さを実感した。ボールプールの注意点がよくわかっていなかった。また、緊張し固くなりすぎて明るい表情になれなかったなど、様々な反省点があった。次回は、明るく笑顔で積極的に関わりたいと思った」

ボールプール担当なら、「そこで子どもと遊べばいい」と簡単に思っていたが、入れない子どもがいたり、争いがあったりと関わり方に技術や知識がいることを理解し、親子と関わるためには、責任感や他者との協調性が必要であることに気づいた。

保護者との様々な関わり (⑤乳児保育における連携)

「子どもを遊ばせている保護者との挨拶はできた。もう少し話す時間を長くできるように、話の内容を広げられるような表現力や知識を身につけたい。学生たちの表情がこわばっているように感じた。自分の担当が初めてだったという可能性もあるのかなと思った」

保護者と挨拶はできたが、話す内容がなく続かない。そのためには表現力や話す知識が必要なことを知った。学生達の顔がこわばっていたことにも気がついている。

「滑り台を担当し、子どもたちが楽しそうに遊んでいる周りをみた時、子どもと一緒に遊びに参加している親、写真やビデオを撮っているだけの親、ママ友と話に夢中の親もいた。携帯に集中している人が気になった」

保護者の子どもとの関わり方の温度差を感じた学生。保護者の様々な様子をみて、普段の親子の関係の個々の違いについても気づいたようである。

(2) 6月

滑り台で必要な援助 (③3歳未満児の発達と保育内容)

「プラスチックと木の滑り台2種類を3人ずつに分かれて担当した。両滑り台とも、階段、踊り場、滑るところ、一人ずつ配置し安全に注意しチームワークよく子どもたちと滑り台を楽しんだ。

『すーっ』など声で効果音を付けるなどして子どもが楽しめるように、また、危険のないように子どもの動きに気を配りつつ、子どもや傍らで見守る保護者とも話をした。親子との関わりを持てるように、話を広げられるような表現力や知識を身につけようと思った。」

第2回目になり、具体的に担当を分けている。滑り台でもチェックする場がいくつもあることに気づいたようだ。滑る時の効果音「すーっ」があると子どもと一体感があり関係もできる。傍にいた保護者とも話しができるようになってきた。

「滑り台の上まで登ったが、滑り台から降りることができない子どもがいた。その時、自分ではどうしたいのかと子どもに聞くことや、子どもをどう援助すべきか考えることが難しかった。初めは登るのを怖がっていた子どもも、一度滑るとそのあとは何度も繰り返して滑っていた。」

学生は、滑り台で子どもが滑れなくなった時にどんな援助の手をだせばいいのかに迷った。「どうしたいの」と子どもに聞くことが必要なことは理解できたようだ。関係ができてきたためか、子どもは何度も遊びを繰り返すことができるようになった。見守っていくことに気づいた。

「われ先にと登りたがる1歳児たちに順番を守ってもらうのは難しかったが、順番を守って遊ぶ子どもも多かった。子どもに理解できるように順番を抜かさないようにする声掛けが難しかった。そんな時は、グループの先輩の子どもへの声掛けがとても上手で参考になった」

1歳児との関わりの中で「順番を守らせる」ということを理解させるために声かけの難しさを

実感していたようだ。そんな時先輩の行動をみて学ぶことに気づいた。

「前回、危険ばかり気になり、ガチガチに子どもをガードしてしまっていたのを反省し、今回は、子どもの背に腕を回していつでも動ける体勢で援助した。滑れたときは、子どもと一緒に拍手して『スゴイ、スゴイ』と褒めた。滑り台は催しものの途中で片づけなければならなかったため、学生がみんなで協力しなければならないことを学んだ」

前回の滑り台での子どもの援助を反省し、今回は、すぐ動ける姿勢で見守った。そうすることで、ほめたり、拍手したりと子どもと一緒に楽しむことができたようだ。途中の遊具の移動の際のみんなでの協力体制についても学んだ。

「ボールプールの中で1歳の子どもが3人で遊んでいたところに、3歳ぐらいの子どもが入ってきて、動き回ったので、1歳の子どもの一人が泣いてしまった。子どもの年齢が違うと、同じ遊具でも遊び方が違うようにみられた。そして、子ども同士の小さな諍いがみられた。異年齢の子どもの遊び方を考えないといけないと思った。さらに、動きが活発な3歳以上の子と、ゆっくりと活動する3歳未満の子どもとは、遊ぶ時間帯を変えて遊ばせると危険回避ができるのではないかと思った。実践での出来事が自分にとって考える機会になっていると感じた。場面に応じて臨機応変に行動できるようになりたいと感じた」

ボールプールは大人が入れないため、子どもだけのスペースになる。そのため1歳児がゆっくり遊んでいた。そこに3歳の子どもが入っていく。遊びの空間のリズムが大きく変化することを学生は学んだ様子。異年齢の子どもの対応を考えることになり、さらに、時間帯を変えることもいいのではないかと、気づいた。

「ままごとで遊んでいた子どもが先におもちゃの包丁を使っていた子から奪ってしまった時、子どもが大泣きした。泣き止むよう関わったが、うまくいかなかった。ところが、子どもの保護者が来て声をかけるとすぐに泣き止んだ。気持ちだけが空回りしてしまった」

ままごとでの諍いで、子どもが大泣きした際に学生が関わって泣き止ませようとしたが、泣き止まなかった。しかし、保護者が子どもに声をかけるとすぐに泣き止んだ。子どもの安心した様子から親子の愛着を知った。

遊びの環境づくり ④乳児保育の実際

「滑り台担当も、計画、準備、実践、片づけなど、取り組み全体を理解しなければ、スムーズに行えないこと、環境面として、玩具を子どもたちが玩具や絵本を踏んで転でしまわないように配慮することを学んだが分かった」

どんな遊びの担当をするにしても、個人やグループとしての目標の設定があり、そのための準備や片づけもある。実践するためにはどれも外せないことや、危険回避のためにも環境の配慮も十分していく必要があることが学べた。

保護者との連携の難しさ (⑤乳児保育における連携)

「2種類の滑り台の人数配置をしっかり決めて、子どもと交流、遊びを円滑に行うことができた。1つの滑り台では、遊具を挟んで2人で対面する形で支援した。今回は滑り台だけでなくリトミックも親子の中に入って行った。保護者は『お姉さんにやってもらったら』と促すが、子どもが親にしがみついて離れず、リトミックどころではなかった。切なかった」

2回目になり適切な人数配置が決まり、円滑に滑り台担当の具体的な支援方法として、2人が対面する形で座るとよいと考えた。左右や前後に2人でサポートできるからである。滑り台での自由あそびの後はリトミックでの子どもの援助も担当した。保護者が、子どもと学生と関わるように促したが、子どもは親から離れなかった。保護者と一緒の場で子どもに関わる大変さを感じたようだ。

「保育室内では全般的には子どもが靴下を脱いだほうが安全だが、滑り台については、裸足だと滑りにくくなってしまった。前回の取り組みは緊張して保護者と話すことができなかったが、2度目は、声をかけられた。子どもに話しかけるだけでなく、親にも話しかける配慮を感じた。年齢をきいたり、ランチメニューの話をしたり、4～5人の保護者と話をすることができた」

保育室が滑りやすいので、子どもは靴下を脱ぐことをお願いしている。しかし、滑り台遊び担当学生が、「靴下を履かないことで滑り台が滑りにくくなってしまう」ということに気づいた。また、親に話しかけることで子どもの現状が聞けて関わりやすくなることも学べたようだ。

「ボールプールの担当時、子どもを遊ばせておいてトイレに行ってしまう保護者がいて、前もって席を立つことを伝えてくれていなかったため、子どもに何かがあった時のことを考えて不安だった」

ボールプール担当はその場を簡単に動くことができない。そこで子どもを遊ばせ保護者が席を外した様子。保護者の気持ちもわかるため、前もって伝えて欲しいと感じた事例である。母親とのコミュニケーションの難しさも知った。

「前回は、開始する時間よりも早めにくる親子がいて、学生たちは対応に困っていたが、今回は、保護者の協力でゆっくりはじめることができたので、準備ができていてスムーズに開始できた」

前回、10時開始の予定でも9時30分前に保護者が来場してしまうことがあって、学生は準備がしっかりできないまま遊びに入った。しかし、今回の保護者の協力を得ることで開始時間を守れたことでスムーズに始まることが分かった。

(3) 7月

年齢による遊びの発達の違い (③3歳未満児の発達と保育内容)

「今回もボールプールは大人気で、ひっきりなしに子どもが遊びに来た。ボールでのいろいろな遊び方が見られた。例えばボール同士をぶつける、ボールを投げる、ボールプールで泳ぐように手足を動かすなど、それぞれの子どもたちが楽しそうに遊んでいた。子どもの年齢発達によって遊び方が違うなど実感した」

年齢発達の違いでのボールでの遊びの様々な種類（ボール同士をおつける、投げる、中で泳ぐなど）が見つけれられたようだ。実践の場でのかかわりの大切さが見て取れた。

「子どもは滑り台を滑り終えたときに、満面の笑顔で大人の顔をみる。達成感を母親と共に味わいたいようが見られたので、その顔が親によく見えるように支援する位置に注意した。母親とのコミュニケーションについては、子どもの名前、月齢から、声掛けをして、前回より話を広げられた。改善点として、滑り台という役割にとらわれすぎて、人数の足りない担当のところにとさっと移動できなかった。次回は視野を広く持ちたい」

3回目の実践で、子どもの気持ちを受け取れる余裕ができてきたようだ。子どもが滑り台を滑った後の満面の笑顔をお母さんに見せたいという気持ちなどに気づき子どもの援助をすることもできるようになってきた。また、母親とのコミュニケーションも具体的に尋ねる内容まで理解した。催しの途中で自由遊びが終わり、遊具の移動があることや足りなくなったところへのサポートなど、様々な出来事を視野に入れて行動できるようになった。

「滑り台の階段ではなく、逆から上ってしまう子ども、前の子を押して滑ろうとしていた子どもがいた。3回目でその子どもたちへの関わり方がやっと分かってきた。逆から上ってしまう子は、優しく体を支え、滑り台の登り口のほうへ一緒に行ってあげることでルールが守れる。前の子を押す子どもには、「わたしはおされるといやだな」と押される側に立った気持ちを伝え、理解できる子どもが多かった」

3回目の滑り台での援助の実践から逆から上がってくる子どもへの対応の方法が分かってきた。子どもの体を優しく支え、滑り台の登り口に一緒に行くこと。「子どもの体を優しく支えて、一緒にいく」ということで子どもの遊びを楽しくすることが分かった。自分が遊びたくて他児を押してしまう2歳児の子どもに、言葉で伝えることで理解できる子どもがいると気づいた。

環境と関わりの評価（④乳児保育の実践）

「子どもが滑る時に勢いがつきすぎて頭や背中を打ち付ける恐れがあったので、手や腕を子どもの背中に回しておいた。頭から滑りそうな子は、座らせて、援助を欲している子にはそっと手を出した。また、笑顔や優しい声掛けなどに注意した」

何度も滑り台で遊んでいる子どもが、頭から滑りだす子どもや、滑る勢いが強すぎる子どもがでてきた。そんな子どもには、声掛けをし、そっと背中に手を回して見守っていく必要があることが分かったようだ。

「室内環境として、室温が28℃設定にされていたが、人数がとても暑く、子どもたちは汗ビショリになりながら遊んでいた。乳児ベッドで寝ている子どもがいたこともあり、催しもののマイクのハウリングなどの環境に注意する必要があると感じた。」

実践の回数を重ねるごとに、取り組みに慣れてきたのか、室内の全体の環境がみられるようになった。室内の温度、寝ている子どもへのマイクの音の気づかいなど全体把握と共に評価できるようになってきた。

「3回目だったので、声のかけ方、援助の仕方など、多くのことに慣れてきたのを実感した。横入りをして、子どもが3～4人入ってしまったときは少し焦ったが、先輩が子どもたちを誘導し、順番に滑らせることができ参考になった。また、①滑る面から登ろうとする子どもは登り口に誘導する。②滑り台の上まで登ると滑れず、踊り場で止まってしまう子どもがいるため、前を向かせ足を延ばして滑れるようにする。③滑る時、頭をぶつけないように頭の後ろを手で支える。登る時は、お尻から落ちないようにお尻を手で支える。④滑り台に子どものよだれがついた時は布巾を用意しすぐに拭くようにする。以上を学んだ」

滑り台遊びでの子どもの支援方法の注意4点。特に、よだれなどが滑り台についてしまった場合は布巾を事前に用意する必要であることが分かったようだ。

保護者から学んだこと（⑤乳児保育における連携）

「滑り台担当。保護者と共に子どもと関わることを恒に意識をした。準備の段階から、しっかり役割分担を考えた動きをし、コーナーの位置関係をしっかり確認した。前々回、前回と比べると早い時間帯で子どもたちが興味を示していることが見て取れた」

3回目の振り返りから、準備の段階で役割分担をすることでスムーズに実践ができたと考えている。子どもの興味を引くことも理解したようだ。

「ボールプール担当。元保育士のお母さんの話で、『自分が心を開ければ、子どもも心を開いてくれるよ』の一言が心に浸みた。ボールプールでは、子どもが入りやすいように積極的に声をかける、ボールの中に紙屑が一緒に入ったのでゴミが入ったら直ぐにとる、ボールプールの中ではしゃいでいる子どもが他の子にぶつからないよう気配りする、などについて周知し、グループで協力して担当した。危険のないように2人以上担当がいるようにした」

保護者が子どもの傍にいないことについて緊張していた学生が、子どもに「自分が心を開けば子ども」とアドバイスをくれた。そこで、緊張しつつも積極的に声をかけた。安全管理のためにもボールプールには2人以上の担当者が必要なことに気づいた。

4) 玩具（車、ままごと・積み木・ブロック、乳児玩具）

(1) 5月

0歳児の発達と関わり方（③3歳未満児の発達と保育内容）

「プラスチック製の車に乗り、子どもたちが自由に動き回って遊んでいた。既成のものより手作りの段ボールの車（写真6参照）が思っていた以上に子どもに喜ばれた。子どもに付き添って援助していると、車同士がすれ違うコースが狭く感じた。遊びの環境と内容を考える必要を感じた」

大学の環境を使つての子育て支援事業の保育実践のため、車での遊びは戸外の校舎の間の人の出入りの少ない場所にコーナーを置いた。入口に入る手前である。しかし、その場所は何台も車を走らせるには狭い。そういったところでの意見であったが、学生の関わりで子どもの遊びの展

開を考えていくことが大切であった。



写真4 木の滑り台



写真5 ボールプール



写真6 車遊びコーナー(段ボールの車)

「ままごと・積み木・ブロックの担当に割り当てられた学生の人数が多かったが、意外に子どもの数が少なく手持無沙汰になる学生もいた。周りをみて人数の多いコーナーに移動し、子どもに関わるが必要だと思った」

様々な玩具は置いたが、コーナーに遊びにくる子どもたちが少なかった。親子に関わらずじっと座っている学生がいたため、担当者間で相談し、混雑しているボールプールや制作に手助けにいった。周りを見渡す必要に気づいた。

「主に乳児玩具の担当をした。特に0歳児への対応が生後何か月かによってそれぞれ発達の段階が異なっているため、難しかった。中には首が座っていない子どももいて、どういう遊びをして関わっていくとよいのか分からなかった。その子どもの発達に合った興味のあるような玩具を意識的に利用して子どもたちや保護者に話しかけることが分からなかった。子どもの中に、人見知りをしていた子がいて、差し出したおもちゃを見て驚いて泣いてしまった。乳児の対応の難しさを実感した」

0歳児保育担当者の難しさを多くの学生が感じている。思ったように言葉が通じないこともあり、学生の中には見ているだけの姿がみられた。差し出した玩具で泣き出された学生はなぜ泣き出したのか分からず焦るばかりで、とまどってしまっている。

保育者の視点 (④乳児保育の実際)

「ままごと・積み木・ブロックの担当。子どもと関わる前に服装やマナーなどをグループで話あったが、それでも髪の毛の縛り忘れやエプロンを忘れた学生が何人かいた。学生にとっては些細なことかも知れないが、子どもたちのための人的環境としての心構えに欠けると思った。幼い子どもたちと同じ空間で過ごすことをもっと意識すべきことだと感じた」

学生が好む服装や髪形と子どもと関わる環境としての服装や髪形などの違いを最初に学んだが、気をつけてきた学生が忘れた学生に助言する姿が見られた。意識して普段の自分から親子の支援をする支援者になる気持ちに変えていくことを学生同士で話し合ったようだ。

「当日は緊張しつつ、一生懸命乳児や保護者に話しかけ、遊びの援助をしようとしていた。0～1歳の子どもの多かった。はじまった直後に親子が一組だけ来てくれた時、ドギマギしてしまい、

もっと積極的に関わるようにと先輩に声をかけられた。乳児との関わりの仕方について改めて勉強する必要があると感じた。全体の流れを把握するほど余裕がなかった。次回はもっと全体を落ち着いていたいと思った」

乳児玩具の担当者は関わりたいという気持ちが空回りしやすい。赤ちゃんがかわいいため声はかけたくるが、保護者との話が續かない。先輩に「積極的に関わるように」と声をかけられたが、余裕がなかった。乳児との関わりの経験が少ない分学ぶことが多様であることに気づいた。

親と子の子育て支援とは（⑤乳児保育における連携）

「ボールプールを担当したのは今回が初めてだったので、どういうことに気をつけるかよく分かっていなかった。また、突然保護者に声をかけられ焦ってしまった。子どもだけでなく、親とも関わる実践だとあらためて感じた」

事前のボールプール担当グループの打ち合わせが十分されていたかったようだ。保護者と関わる必要があることが把握されていなかったことから、焦りが出たようだ。

（2）6月

乳児期の発達と遊びの違いの理解（③3歳未満児の発達と保育内容）

「車コーナーは受付から一番近いこともあり、入口に入る前に車をみてそれに興味を持つ1歳～2歳の子どもがきて遊んでいた。もう少しコーナーの入り口が広くすると安全に遊べると感じた。1歳代の子どもが多く参加しているため、2歳10か月の子どもの体がとても大きく見え、遊び方も大胆だったので、年齢による遊びの差を感じた。中には、母親にべったりで少しでも離れると泣き出してしまふ子がいた。取り組みが進むにつれて、みんなが参加していくのにもかわらず、一人で歩き回っていた。遊びに入れない子どもに関われることばや関わり方を学ぶ必要を感じた」

車コーナーでも異年齢の子どもの交流が楽しい反面危険が伴うことを理解したようだ。発達の差が遊びの違いに繋がる。母親と離れられない子どもや遊びに入れない子どもへの誘い掛け方の学ぶ必要を感じたようだ。

「2回目ということもあって、要領がつかめてきたのか、ままごと積み木コーナーは前回に比べて積極的に親子と関わられた。積み木コーナーから制作コーナーへ親子を誘導させたり、リトミックから劇へと場所を展開させたりと、余裕ができて周りをみて動けるようになった」

ままごと・積み木コーナーは座って遊ぶことが多く、取り組みが変化していく場合の場面変換がとても難しい。しかし、環境を変えずその場に留まる制作コーナーへの誘導がうまくいったようだ。学生の自信につながった。

「ままごと玩具のお菓子を食べようとしている子どもが多くいた。中には積み木をなめる子どももいた。ところが、野菜を食べようとした子どもは余りいなかった。キッチン玩具の流しの部分を取り外したり、野菜や果物を切ったり、お茶を飲む真似などをしていた。野菜を手で二つに分

けるのが気に入った子がいたため、そのまねをすると、楽しそうに笑ってくれた。また、コルク素材の積み木を自分で積み上げ、つくったり崩したりを繰り返して遊んでいた。いくつかのブロックをつなげて線路を作っている子どももいた。子どもたちは同じ場所で同じおもちゃで遊んでも一緒に遊ぶことはなく、ほとんどが並行遊びだった。子どもたちは一人ひとり興味を示すものが違うと授業で学んだ。また、その子どもが興味を示したものに合わせた遊びを選ぶということが大切であった。」

ままごと遊びでのエピソードである。お菓子の玩具を食べる真似をする子どもが多くいた。ところが、野菜の形をした玩具は食べる真似をする子どもは少なかった。子どもたちは、野菜は料理するものと思ったのか、あるいは、野菜が苦手なのか、学生は、子どもの食生活を考える機会をもてた。さらに、関わりに困った時に子どもの真似をすると笑ってくれたことに気づく。遊びに入っているのが1歳～2歳の子どもたちは、並行遊びが多いと学んだようだ。

「乳児玩具でクルミが2個入った木製玩具（写真8参照）が特に人気だった。可愛い音色もないのだが、観察していると、どの子どもも中のクルミを取ろうとする姿があった。中でコロコロと動くのが不思議なのかも知れない。手で一生懸命クルミを取ろうとするが、取れない。その繰り返していた。どの乳児も同じ行動をしていて面白いと感じた」

学生が観察していて気づいた人気の乳児玩具は木製玩具の中でもこの素朴なクルミのはいったものだった。握って振ると中でコロコロとクルミが動く玩具である。学生は意外な発見だったと感じている。



写真7 ままごと遊び



写真8 クルミが入った木製玩具



写真9 乳児ベッドでの関わり

「畳の上の遊びは子どもが寝転がったり、保護者や子ども、学生と近づいて座ってコミュニケーションが取れたり、のびのびとゆったり遊ぶ姿が見られた。乳児の中には『はいはい』や、『つかまり立ち』の練習をしている子どももいたため、広いスペースでの遊びは発達につながると思った」

乳児のための畳のスペースは保護者と座って話ができることや、乳児「はいはい」や「つかまり立ち」を目の前でみることができる親子だけでなく学生にとっても学べる空間である。重い畳の準備と片づけが大変だが、子どもたちにとって大切な空間である。

「今回、特に、誤飲等に注意した。乳児は、玩具などさまざまなものを口に入れようとしてしまう。そのときは、『これは食べちゃダメだよ』と言いながら、子どもから玩具を少しだけ離れた。

しかし、もう一度口にしてしまうなどして、促し方法が難しかった」

誤飲は乳児の起こりやすい事故である。子どもが目の前のものを手に取って口に入れてしまうため、ただ言葉だけで「食べてはいけない」と伝えても子どもは理解できないことを学んだ。

自己目標設定と保育実践（④乳児保育の実際）

「車担当として、今回は『子どもが車遊びを楽しめるように支援する』という目標を設定した。子どもは車を自分の足でこいで通路の一番奥まで進むことができた。その後、子どもは振り返り、母親にうれしそうに笑顔を見せていた。感動したり、嬉しかったりしたことを親子で伝え合って楽しんでいるなと思った」

学生の目標は、子どもが車遊びを楽しむことだった。感動や嬉しさを親子伝え合う姿をみて、ただ関わるだけではなく目標の必要性を理解した。

「ままごとコーナーに子どもたちが来たが、初めはどのようにして遊ばせるかわからず、うまく関われなかった。保護者に家での遊び方を教えてもらったり、周りで遊んでいる子どもの真似をしたりして学んだ。保護者とは前回よりも積極的に話し、子どもたちとコミュニケーションを取りながら、危険がないかも配慮した。

持ち場を離れた時は、代わりにそのコーナーに入るように努力し、グループ内でも積極的にコミュニケーションを取るよう務めることができたようになった」

ままごと遊びは学生にも遊んだ経験があるため、気軽に感じて担当を引き受けた。しかし、子どもへの関わり方から分からなかった。そんな時、保護者に家での遊び方を聞いたり、周りの学生と子どもの遊びの真似をしたりして学ぶ。

「引き続き、乳児玩具コーナーを担当した。今回特に感じたのは、子どもの遊びが発達で変化していること。畳で広いスペースを取っているため、乳児が動き回りやすく、乳児の活動を妨げる障害物が少ない。そのことに気が付くことができたが、具体的な援助をすることができなかったため、次回は親子との関わりの中で、遊びの中の発達の理解と援助や配慮の仕方を目指して入れていきたい」

前回関わった子どもの変化を見ることができた。1か月後の今回、ハイハイできるようになって畳のコーナーで移動していた。しかし、その子どもにどう関わっていいのか分からなかったようだ。次回の目標にしたいと考えている。

「2回目なので、事前の環境への配慮として、小さなゴミを事前にチェックした。赤ちゃんコーナーなので、小物をつまんで口に入れないように気をつけ、髪型、動きやすい服装、エプロン、名札、黒髪、髪が長い人は結び、前髪が垂れていたらピンで留め、挨拶は大きな声ではっきりと笑顔で接するなどをグループで確認し合った。グループで準備や玩具の消毒、片づけなど、協力してできたと感じた」

子育て支援の場全体を消毒するのは当然だが、赤ちゃんコーナーでは特にマットや畳の上に掃除機をかけ、消毒した布巾で乾拭きをする。そういった注意は何度も事前にチェックする。また、

学生自身の身だしなみもグループで見直すことの大切さは実感している。

親子に楽しく参加してもらうために（⑤乳児保育における連携）

「10時開場、11時30分から誕生会を開始した。誕生児がはしゃいでいる姿を見て、保護者がうれしそうに微笑んでいる姿が印象的だった。みんなで拍手をする時、周りにいた保護者全員が拍手をしていたことに気づいた。自分の子どもだけではなく、周りにいる子供の誕生日もみんなで一緒に祝いをしてあげることが、とても素晴らしいことだと思う。支えあって、子育てしていくことが大切なことだと学んだ。一方、誕生会が始まるころには他児のことだと思うのか、帰りだす親子たちもいる。ランチに向かうのかも知れなかった。最後まで参加してもらう方法を考えていく必要を感じた」

毎月行われる誕生会、学生たちが何日もかかって考えた保育内容である。親子に楽しんで参加してもらうために誕生カードを50人分作った。ところが、他児のことだと思うのか、誕生会に参加せず退場していく親子は結構な人数いた。そういった保護者に最後まで付き合ってもらうために、できることがあるのではと思ったようだ。

「保護者の中で、昼のところで昼食を取れますかという質問が出た。学食だと子ども用の椅子がないため、特に0～1歳児が昼食をとることが大変らしい。この要望をどう対応すべきか考えていくべきだと感じた」

保護者から、昼食を親子でゆっくり取りたいとの希望が学生に向けて質問があった。親子グループでゆっくり食堂では食べることができないとのことだった。対応の仕方を考えることにした。

（3）7月

遊びの中での危険（③3歳未満児の発達と保育内容）

「前回来場した子どもが覚えていて今回また車コーナーにきてくれた。年齢が大きくなるにつれて足でこぐ力が強くなり、勢いよく走らせたため前のめりになりひっくり返ってしまった。幸い怪我はなかったが、周りの安全に注意して見守ることが大切だと思った。親と子の顔と名前を覚え、子どもが動いても、子どもの居場所を親に伝えられるように心がけた」

車遊びが気に入ったようで子どもが覚えていてくれた。しかし、異年齢の子どもと遊ぶことで活動の違いを強く感じた。怪我はなかったが、ヒヤッとしたことがあった。親子が離れる場合があるため、親子で名前と顔を覚え、子どもの様子を母親に伝えられるようにする必要があることに気づいた。

「今回の夏の遊び『水風船』は、猛暑だったため、子どもたちが冷たい感触を味わっていた。この時期の遊びとして楽しめると思った。夏休み中の兄弟も来て、発達段階による遊び方の違いが見られた。乳児は、包丁の刀の向きを逆さにしたり、まな板を使わずに切ったりすることが多かった。しかし、幼児は包丁の向きも気にし、まな板も使用した。切った野菜を皿に盛り付け、料理に見立てていた。遊びの具体的な違いを見ることができた」

7月は夏の遊びとして水風船が企画された。保育所や幼稚園に通う兄弟たちに向けての遊びに設定した。冷たい感触が味わえるため人気があった。3歳～6歳の兄弟たちが参加してくれたため、学生達は、ままごと遊びの包丁さばきなどは幼児の手先の高度な動きをみることができた。

「乳児は生後4か月くらいだと音に敏感で、鈴などの玩具を楽しむことができることを学んでいたため、実際に乳児に音の出るおもちゃで興味を引き遊びを展開させることができた。また、中腰でいる時間が長かったため、足がしびれてしまった。思わず足をすべて地べたにつけてしまった。いつ事故が発生するかわからないため、足がしびれないように体位を変えながら立ち上がることのできる姿勢を保った」

子どもの興味を引く音の出る玩具を振るなどしながら、遊びの誘い掛けができるようになってきた。また、支援するものは、子どもに危険のないように、いつでも動ける体位でいる必要があることを学んだ。長時間姿勢を変えなかったため、足がしびれてしまった。体位を変えて関わる必要があることも知ったようだ。

「積み木コーナーでは大きな塔を建てて、遊びに工夫をした。積み木を投げて遊ぶ姿があり、周りの子どもに注意する必要を感じた。子どもが指をさして何かを伝えようとしていた。しかし、指さした方向にいくつかの玩具があって、どの玩具を指さしているのか分からなかった。残念だった」

子どもが指さして何かを伝えたいと思う行為になることは読み取れても、それが何を示しているのか分からず残念な気持ちになったという。子どもの気持ちを読み取るため、欲しい玩具を子どもに見せて聞いてみるという行為が考えられずにいるようだ。まだ少し、子どもに近づけていないようすが見て取れた。

「普段の保護者の慣れた抱き方でないとぐずってしまうこと、遊びに集中力がなくなるため玩具を出しすぎではいけない、など授業で学んだため、子どもに実践しようと考えていた。ところが、担当が一人になってしまい焦ってしまった。子ども同士のものの取り合いが起きても対応できなかった。その時、偶然別のコーナーから学生が応援に来てくれたので、対応することができてホッとした。子どもたちの遊びの発達の理解ができない場面があって関われなかった。理解があれば、援助ができたのと思う」

乳児が安心して過ごせる環境を授業の中で学んでいた。しかし、子ども同士のものの取り合いをみた際、どう仲立ちしていいのか迷ってしまった。そこへ、応援に来てくれた学生が、同じ種類の玩具を2つ用意してくれて子どもは納得した。その関わりをみてホッとした。より深く年齢による遊びの発達の理解の学びの必要性を感じたようだ。

保育室の安全確保（④乳児保育の実際）

「乳児コーナーは畳の上で寝る子どものために玩具を集めスペースを確保することが大切であった。また、乳児ベッドの担当をする学生（写真9参照）が割り当てられていた。ベッド使用時、布団による窒息死の発生を注意することが必要だった」

乳児の遊びのスペースには多くの親子が座り手狭になりがちのため、畳の上のスペースで子どもが寝られる環境を設定しなければならない。また、授業で学んだ「乳児の窒息死」をふまえ、ベッドで子どもを寝かせておく際の安全確保のため、注意が必要なことに気づいた。

「学生側から親に関わり、普段子どもはどのようなところで遊んでいるかなど、様々な声を聞いた。保護者に子どもの様子尋ねることで自分の目の前の子どもの発達の様子を知ることができることが分かった。子どもとどんな玩具遊びをすると楽しめるか知ることができると感じた。また、乳児との関わりの中、来ていた兄弟が、『〇〇ちゃんはこの玩具が好きだよ』と様々なことを教えてくれる子が多くいた。兄弟も情報源だと思った」

保護者に尋ねることで子どもの普段の様子が分かること、それが、安心して遊べる環境づくりにつながることが理解できたようだ。また、兄弟も子どもの情報源だと気づいた。

遊びの目的をもってくる親子（⑤乳児保育における連携）

「車のコーナーが室外にあるため来場時に確認している子どもは、親子で挨拶すると同時に車に遊びに来る子どもも多かった。前回遊んで楽しかった様子で、車遊びを目的にしてきた子どもがいた」

車のコーナーは特定の子どもの毎回来てくれるため、親子と仲良くなりやすいコーナーでもある。学生の顔をみてコーナーにくる子どももいて、興味のある車遊びと担当する学生を会えることを楽しみにしてくる子どももいるようだ。

5) 駐車場

(1) 5月

戸外での親子の安全確認（③3歳未満児の発達と保育内容）

「駐車場で歩く親子を想定して、事前に誘導レクチャー（写真10参照）した。また、レクチャーだけでなく、実際に学内を歩いてみて危険を体で感じる必要があると分かった。」



写真10 駐車場(誘導レクチャー)



写真11 お子様ランチメニュー



写真12 食券売場(準備)

駐車場は、常に危険が伴うので、事前確認は必ず必要になる。また、駐車場から会場までの道のりを実際に歩いてみることは親子の安全に繋がることである。思った以上に足元がデコボコしていて、子どもがつまずきやすい状態であることが分かった。安全確認の重要性を理解した。

人的環境としての配慮（④乳児保育の実際）

「保護者と接することもあり、保育学生としての身だしなみは前日までに直しておくことが大切だと確認した。天気によっては、帽子やパーカーなどの配慮も必要だと思う」

身だしなみについては授業中何度も学んだ。しかし、1年生が高校を卒業したばかりで、初めて金髪に染めたこともあり、髪の色を通常に戻すことや、流行の服装を保育現場のような様相に変えてくることを躊躇する場合もある。先輩学生は、そういった場合の説明に困っていたようだ。また、帽子やパーカーなども気温や気候の変化に対応する必要があることも学んだようだ。

親子と学生が連携（⑤乳児保育における連携）

「いつもは3人で駐車場係をやっているが、今回は5人で安全面に特に注意したため、細やかな対応ができた。先輩後輩なく連携できたことなど貴重な体験だったと思った」

他県の子育て支援センター駐車場で子どもを撥ねる事故が起きた。初回駐車場の担当者がいるため、担当人数を増やした。学生達が連携して担当できたことと、事故がなかったことで達成感を味わったようだ。

（2）6月

親子の行動の見守り（③3歳未満児の発達と保育内容）

「猛暑でも元気に動き回る子どもに対し、目を離さず面倒を見ていることが必要だった。ベビーカーを押す母親とその子どもにも注意した。他の支援センターでの事故の様子を聞いたため、一層安全に対して気をつけた」

事故の話を知っていたので、元気な子どもが狭い通路を走り回る姿をみて緊張したようだ。

安全のための誘導のしかた（④乳児保育の実際）

「今回は、前回よりも多く第3駐車場までいっぱいになってしまうくらいの来場者だった。後方駐車が苦手そうな人には、誘導をして駐車してもらった。子どもの足もとの安全を確かめることが大切だったと思った」

2回目になり、駐車が苦手そうな保護者をサポートすることや子どもの安全を確かめるなど余裕が出てきた。

挨拶からのコミュニケーション（⑤乳児保育における連携）

「駐車場が混んでしまったため、『ここに停めてもいいですか』と聞いてきた。車を誘導する際の動きに興味をもったのか話す間、子どもがずっと顔を見てくれた。母との話の後その子どもにも『おはよう』とあいさつしたら、『おはよう』と言葉をかえしてくれて、非常にうれしく感じた。駐車場担当の親子のコミュニケーションを学んだ。妊婦さんには近い駐車スペースに停めてもらった。妊婦さんの配慮することもグループで話し合う必要を感じた」

駐車場でも親子との挨拶のやり取りがあった。関わり大切さと楽しさがあったようだ。妊婦

さんへの駐車場で配慮が必要なことも理解できてきた。

(3) 7月

担当者間の温度差 (③3歳未満児の発達と保育内容)

「毎回担当での声のかけ方や案内の仕方など、担当全員に現状報告することで安全な駐車場の維持を務めることができることは分かったが、担当位置をかってに離れる学生がいた。注意することができなかったことから、後輩への注意の仕方が難しいと感じた。車の誘導をしながら子どもの行動を見ていたが、駐車場に入ってくる台数が増えると見られない子どもが出てくる。顔を見た親子全員に挨拶をしたいが、お母さん同士で話していると、挨拶のタイミングがはかれず、非常に挨拶にくい。また、暑さで笑顔を忘れてしまうことがあった」

担当位置を離れる後輩がいたが、注意できなかったことや、駐車場に入る車の台数が増えると安全確認が難しくなることなど駐車場案内でも問題が見えてきたようだ。挨拶もしたいが、タイミングが難しいと感じたようだ。

グループで見守る責任 (④乳児保育の実際)

「3回目で様子が分かってきたためか、駐車場が満車になった際、声を出してグループのメンバーに合図を送り確認を取り合った。グループ内で連携を取り合えた。子どもだけで駐車場に置いておかれた子どもにも対応していた。持ち場を意識して担当することが前提だと感じた」

満車になった際にグループで合図を送ることができるようになった。子どもだけ先に車から降りて駐車場に入る保護者がいるため、子どもの安全のためその支援も学生が責任をもって行わなければならないことが分かってきた。

保護者の質問からのコミュニケーション (⑤乳児保育における連携)

「駐車場の持ち場にいと、『催しはどこでやっていますか』と聞かれることが多かった。場所が分からず迷った保護者がいたので、持ち場を学生に頼んで、新館まで親子と一緒に歩いて案内した。到着して母親から『ありがとうございます。助かりました』と言われ、うれしい気持ちになった」

駐車場でも保護者からの質問に答える場面がある。そんな時一緒に歩いて案内した。そうしたことでお礼を言われ、うれしくなったようだ。一緒に歩くためには他学生にその場を頼むことも必要であることが分かった。

6) 食券

(1) 5月

食券案内の内容理解 (③3歳未満児の発達と保育内容)

「担当者内で親子への挨拶、食券売りメニュー内容(写真11参照)の説明、購買会計、来場者カウント(親の数・子どもの数・食券の売り上げ数)の確認をしたが、食券販売が初めてだったので戸惑い、何をしていたらいいか混乱した」

食券案内でも、その手順と様々な担当がある。短時間に保護者に対応しなくてはならないためその手順に混乱した。

親子の把握と責任 (④乳児保育の実際)

「途中から担当(1限に授業があり)に入ったため、うまく流れに乗ってはいけなかった。途中からは状況の把握が難しい。エレベーターに一人で入ろうとする子どもがいた。今回は参加した親子が多かったせいもあって見守りが手薄だったこともあるが、常に注意して周りを見ていることの大切さを痛感した」

学生の授業時間の都合で途中から担当に入る学生もいる。そういった場合は素早い状況把握が必要になる。また、エレベーター近くにいる子どもの安全の確認も必要なため、担当の様々な支援の難しさを痛感した。

保護者が理解できる説明方法 (⑤乳児保育における連携)

「保護者が、お子様ランチ(写真11参照)の価格の安さにびっくりしていた。一般的にお子様ランチはどれも高いのかもしれないと気付いた。お子様ランチなので、『大人は注文できない』と思われるがちだったり、量が少ないと思われる、張り紙や看板があると分かりやすいのではないかと思った。お子様ランチについて、情報が少ない。事前に内容把握の必要性を感じた。グループ内で意見を出し合い、学生が考え意見をまとめ、食堂に相談する形にする流れの把握が大切であった」

大学の学食で、保育実践の日のみお子様ランチが食べられる。その量の多さと安さは写真をみて保護者に驚かれる。「お子様ランチ」というメニューなため、大人は食べられないと思われることもある。そのためわかりやすい説明方法を学生同士が意見を出し合い食堂にも協力を求めるとよいと考えたようだ。

(2) 6月

内容の把握とポイントのまとめ (③3歳未満児の発達と保育内容)

「食券売り場は、一時に大勢の家族が来たときはとても対応に困った。担当者がやるべきことやポイントなどを引き継ぎノートにまとめれば、引き継いだ人も自分のやるべきことが明確になって余裕が出るのでは、と感じた」

担当役割の把握の方法にポイントをまとめた引き継ぎノートを利用することを考えた。

親子の気持ちと自分の思い (④乳児保育の実際)

「保護者が支払いをする時、子どもの安全に注意した。おつりが不足した際は、もう一度来てもらうか、こちらから何うようにした。また、食券を買わなかった家族にも、『来月もありますよ』と声をかけるなどすることができると思った。自分がよかったと想着いても、周りから見たら不十分なところがあるので、次回からは自分からみた視点と、周りからみた自分の行動などを踏まえながらやっていく必要があった」

おつりが不足した場合の保護者への対応の理解ができた。さらに、食券を買わない親にも声をかけてコミュニケーションを取ることができるようになった。自分の行動を客観的に視点でみる必要性が分かって来た。

様々な親子への対応の方法を学ぶ (⑤乳児保育における連携)

「今回は、お母さん友達同士で来ている人たちが多かった。反面、子どもとお母さんだけのグループがあり、そういったグループには積極的に話しをすることが大切だと思った。少人数のグループは子どもの話がメインだったが、大人数グループになると、学生たちに学校での生活について聞かれた。母親たちが学生の話を知りたい気持ちがあることに気づいた」

保護者のグループごとの話の内容の違いを比べる余裕が見て取れるようになってきた。「学生の話も聞きたい」という保護者の気持ちにも興味がでてきたようだ。

「食券売り場の準備(写真12参照)ができていない9時半ごろに、来場者が来てしまった。早めに準備が必要であった。保護者にも時間を守ってきてもらうことで、催し全体の環境整備ができることも理解してもらうことが大切だと思った。また、ママ友との話に夢中で、子どもと一緒に遊ぼうとしない親がいた。その姿をみて、『学生に任せてしまって平気なのかな』と思いつつ、子どもが怪我しないように注意して関わった」

親子が準備中に来場した。当日も8時30分から会場準備をしているが、まだ準備不足の状態であった。環境整備の大切さを理解した。ママ友と話し込んでいる親たちを見て学生任せに不安をもった学生もあった。

「初参加の親子はだいたい親子2人でいる人が多かった。一方、友達同士で何回か利用している人たちは、子どもとだけでなく親同士でゆっくり話しこんでいた。親子2人だけでなく他の親子と交流できるような誘い掛けを考えたいと思った」

この学生は、初参加の親子と何回か利用している親子との行動をゆっくりみていたようだ。交流できなかった親子への誘い掛け方を考えることができたようになった。

(3) 7月

分かりやすく伝える技術 (③3歳未満児の発達と保育内容)

「今回はスムーズな流れを心掛けた。保護者にメニューの写真をみせて声掛け、「今日のメニューはこれです」と分かりやすく説明できた。また、食券を買わない人に対しても、『地下1

階に他のメニューが展示してありますのでご利用ください』と声かけし、『来月にはこんなメニューがあります、次回ご利用ください』と買わない人にも声をかけた。少し余裕ができたと感じた」

保護者への食券やメニュー、食堂の場所紹介など具体的に分かりやすい言葉で説明できるようになった。学生自身も余裕が感じられるようになってきている。

「売り場が入り口付近にあるので、親子が最初に立ち入る場所だからこそ、食券係は笑顔で接し、緊張してくれている親子の雰囲気と和ませる役割を担うことが必要であった。食券を買ってもらう際、両手がふさがってしまう人や、重い荷物を持っている人のために、子どもがそのまま放置されていないかなど常に気を付けた。親同士が話をしている、子どもを見ずに遊ばせている母親がいたため、学生は危険を意識して対応しなければならないと思った」

笑顔で接し、自分たちが緊張していたことを乗り越えて、親子の緊張と和ませる役割であることまで考えられるようになった。保護者への荷物の気づかいや母親の立ち話時の子どもの危険把握まで気づくことができた。

食券売場の環境づくり (④乳児保育の実際)

「入口の食券受付を素通りされやすかった。親子に食券売り場がアピールできるように子どもの目を引く興味のある風船などを置くことも必要だと思った。つい、母親にランチの説明することばかりに気がいって、子どもの身長の高さを無視しがちになった。子どもの目線で話しかけることが大切だと気がついた。上から声をかけられると怖いかも知れないと感じ十分注意した。」

子どもが遊びたいと会場に急ぐあまりに、食券売り場を素通りせずに立ち寄るためは、と考え、子どもの興味を引く風船を置くことも考えられるようになった。また、保護者への説明の仕方だけでなく、その周りにいる子どもの目線でのコミュニケーションまで気づいた。

子育て支援で心が温かくなる (⑤乳児保育における連携)

「参加した親子の中で、今日初対面のお母さん同士が沢山話しているのを見た。『食券はいらないです』と言われた親に対しても、『ありがとうございます』と声をかけた。そうすると、親から、『夏場は公園にずっといることができないから、ここに来られてうれしい』という言葉聞くことができた。食堂の案内に行くとランチを食べている親子がとても楽しそうにしている様子を見て、心が温かくなった」

「食券はいらない」という言葉を否定的に受け止めることをしなくなったため、母親とのコミュニケーションが深まっていくことになっている。「ここに来てうれしい」という親の言葉も聞かれることになった。親子の様子が楽しそうにみられ学生自身が感動するという体験もできるようになった。

4. まとめ

ここでは、5月～7月（3か月間）大学構内で行われた保育実践の場「学生による子育て広場 あちょぼ」での学生の気づきから、科目「乳児保育」の内容についての学生たちの学びの経過と成果についてまとめていくことにする。

①乳児保育の理念と役割（乳児保育の役割と機能）

保育実践を通して、学生がまず学んだことは、『学生自身が親子を支援する支援者という立場にある』ということである。それは学生と立場が異なること。たとえば、普段のように髪型や服装なども自分の好きなスタイルでいるのではなく、支援者として親子と接する人としての環境となるスタイルが必要になることであった。そのため「身だしなみ」を考えられるようになった。特に、駐車場・受付・食券担当者は、親子が来場した早い段階で関わることもあり、学生同士で確認し合う姿もみられた。しかし、個々の学生の「身だしなみ」の配慮（金髪に染めた髪）についての意識には温度差があり、グループ内での課題も残った。

②乳児保育の現状と課題（家庭的保育等における乳児保育）

乳児保育の生活環境を整えるため、保育室内の床に畳やマットを敷き、子どもがハイハイやつかまり立ちなどができるようにしている。できるだけ家庭で過ごす環境と変わらないように、広めのスペースにした。また、子どもの楽しめる遊具や玩具、乳児用ベッドをそろえた。とくに、乳児玩具担当の学生たちは、その環境づくりに準備段階から加わっているため、乳児のための環境づくりや安全保育について学ぶことができたと考える。

③3歳未満児の発達と保育内容

（i 乳児保育における基本的な知識・技術に基づく援助や関わり）

毎回の3歳未満児の子どもとの関係づくりについては、最初の5月の取り組みでは、多くの玩具や遊具の担当学生たちが、子どもの傍にいて、子どもの遊びの様子をみるだけが精一杯だった。ところが、振り返りや改善、グループでの相談などを経ていくことで、子どもの楽しめる遊びへの誘いかたや遊びを継続するための声掛けなどの技術を身につけていくことができるようになっていった。

子どもの楽しむ方法についての知識については、実践の中での先輩や他学生の関わりを見て学ぶことが多かった。具体的な課題を細かく整理し、段階を経る知識の習得方法も理解したようだ。

（ii 3歳未満児の発達と保育内容）

子どもの楽しめる遊具や玩具での遊び方の理解をするためには、子どもの年齢発達にあった保育内容が必要なことを理解できてきた。例えば、滑り台では階段、踊り場、滑る面に人員を配置し、学生が、優しく子どもの体を支えて階段に向かわせることで滑り台でのルールが守られることや、滑る際に効果音を発してやると、子どもと一体感が生まれ、より関係深まること

も学んだ。それは、乳児と関わる中で、子どもの発達を理解できるようになったためと考えられる。

今後は、「乳児保育」として、子どもの発達過程や子どもの発達に応じた遊びについては、さらに詳しく具体的に学習させていく必要を感じている。

④乳児保育の実際

(i 保育課程に基づく指導計画の作成と観察・記録及び自己評価)

保育の指導計画は、準備段階の時間にグループで考えた。回を重ねるごとに話し合いがスムーズに行われるようになり、担当部の環境構成図などを描き、グループで共有している姿がみられるようになった。指導計画は、催し全体を計画するというより、担当部分の計画をするが、与えられた持ち場や時間配分、役割を計画することができてきた。目標を高くしすぎて苦しくなってしまうたり、取り組みの途中に変更せざるを得なくなったりと、学生自身が振り返り見直すことができるようになった。

中には、「～できない」と記録に記す学生があり、「できる、できない」気持ちだけに縛られ、目的を見失う姿があった。しかし、先輩やグループの学生の姿を見て、『自分ひとりができないのではない、みんな同じ問題を抱えている』ということが理解できたようで、回を重ねるごとに親子との関わりでだんだんと表情が明るくなっていく学生もみられた。

学生の記録の仕方については、個々の能力の違いや取り組みの温度差を考慮し、個々に応じて学ばせる時間をもつ必要を感じた。

(ii 個々の発達を促す生活と遊びの環境)

たとえば、家庭のように、畳のある環境は子どもが「寝る」「はいはい」「つかまり立ち」などその子どもの発達に応じて自由に活動できる。異年齢の子どもが傍に遊んでいることも子どもには良い刺激になる。学生は、様々な玩具や遊具での遊びを見ることや体験をすることを通して、それぞれの子どもの発達を促す環境を学んでいた。より深く個々の遊びや生活を知るためには、保護者に子どもの日々の様子を聞いてそれをもとに関わることを学んだ学生もいた。

(iii 職員間の協働)

乳児保育の現場でも、職場の先輩や後輩、他職種との連携をしていく必要がある。子どもの最善の利益のためには、円滑な人間関係がよい保育環境をつくるといっても過言ではない。

学生たちも先輩や後輩との関係について、実践を通してかなり意識したようである。「滑り台担当が初回なので緊張した。先輩に子どもとの関わり方の助言を受け、同じ様にやってみた。教えられた通り、できるだけ積極的に笑顔で親子に声をかけると、少しずつその場の雰囲気慣れることができた。先輩の大きさを感じた」と記述して学生がいた。先輩が子どもとの関わり方を助言してくれ連携して親子と接することができたようだ。先輩との関係づくりの大切さを理解した。一方、「駐車場で、勝手に持ち場を離れてしまった後輩への注意の仕方が難しい」と後輩への助言についての困難さを感じる学生もいた。

こうした異学年や同学年の同性や異性の学生との関係づくりを基礎に子育て支援の現場に

入っていくためには、保育実践は非常に有効であると考えられた。

⑤乳児保育における連携（保護者とのパートナーシップ）

学生が参加した様々な親子と関わりをしていると、気づいたことがあった。例えば、誕生会に参加した保護者がうれしそうに子どもと微笑んでいる姿や、その周りにいた保護者全員が拍手をしている姿をみて、自分の子どもだけではなく、周りのみんなと一緒に祝っても素晴らしいことだと思ったようだ。それは、支援する側も親子と支えあって、子育てしていくことが大切なことと理解した。しかし、一方では、誕生会が始まるころには他児のことだと思うのか、参加せず退場していく親子も多い現状が見て取れた。

また、ママ友と話しに夢中になり、学生に子どもを完全に任せっきりになってしまう母親の姿も見ている。学生が、こういった経験を目の当たりにして、支援者側の親子の理想や意図だけが真の意味の親子の支援になるのではないことや、子育て支援の場が親子にとって何なのかを見つめ直すことができたのではないかと考えている。

おわりに

『学生による子育て広場あちよほ』実践の実際には、保育士養成に必要なそれぞれの教科学習が組み込まれている。「乳児保育」では、乳児の保育の視点を通して学生の成果をみつめたが、回を重ねることに、学生の保護者と乳児とのコミュニケーション技術の向上が見て取れるようになっていった。したがって、最初にコミュニケーション能力が身に付き始めてから、その他の目標(役割、家庭的保育、発達などの基本的知識、保育の技能、子育て支援の環境づくり、記録、自己評価、支援者間の連携、保護者とのパートナーシップなど)に向かうモチベーションが上がっていったと考えられる。それは、実践的な学習を何度も行え、改善点を次回に活かすことができる学習方法を「乳児保育」に取り入れた結果ではないかとも思えた。

一方、親子の関わりを身近で見ていない自分自身を否定的に感じ、保育に対するモチベーションを下げってしまう学生がいた。担当グループ内で先輩たちにサポートされながら、その否定的な感情を徐々に昇華していった学生がいたこともあり、こうした学生には異学年での学習の成果があった。

今回は、乳児保育の実践研究のため、子育て支援の現場で長年乳児保育に携わっている現職の保育士2名に保育士の立場から学生の学習の成果を検証してもらった。それは、保育教員の所見でなく現場保育士の目でしっかり学生の変化を見つめることができると考えてのことだった。

謝辞

ご多忙中にもかかわらずご協力いただいた、社会福祉法人大原福祉会大原保育園鍵田顕映園長にお礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 「保育士は今－求められる専門性－」.『中日新聞サンデー版＋テレビ世界と日本大図鑑No.1065』. 中日新聞社, 2012, 10, 14
- 2) 「保育士養成課程等の改定について（中間まとめ）」.『保育士養成課程等検討会』, 2010, 3, 24
- 3) 「『保育実務研修』における成果①」. 永田恵実子著.『日本保育学会第63回大会発表要旨集』, 2010, p696.
- 4) 「『保育実務研修』における成果②－学生の自己評価から－」. 茂木七香・永田恵実子・矢田貝真一著『日本保育学会第63回大会発表要旨集』, 2010, p697.
- 5) 「実践的指導力育成をめざす『保育実務研修』についての考察（１）－３年制保育者養成課程における科目としての成果と課題－」. 矢田貝真一・永田恵実子著.『大垣女子短期大学紀要第51号』, 2010, p49-60.
- 6) 乳児保育研究会編：『改訂新版資料でわかる乳児保育新時代』 ひとなる書房、2010, P10-167.
- 7) 『新時代の保育双書乳児保育』. 大橋君子編著, みらい, 2009, p51-77.
- 8) 『新・乳児保育の生活と保育』. 松本園子編著, ななみ書房, 2006, P37-54.
- 9) 『乳児保育－一人ひとりが大切に育てられるために－』. 吉本和子著, エーデル研究所, 2002.
- 10) 「全国保育士養成協議会専門委員会：保育士養成システムのパラダイム転換Ⅰ～Ⅲ」,『保育士養成資料集第44号, 46号, 48号』, 2006, 2007, 2008.
- 11) 「保育者の実践力に関する研究－遊びと交流活動との関係から－」. 清水一巳著.『名古屋女子大学紀要第55（人・社）号』, 2009, p89-102.
- 12) 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について－子どもの最善の利益のために幼児教育を考える－（中央教育審議会答申）」『文部科学省』, 2005.
- 13) 『保育者と母親のための共に育てる共育書0. 1. 2 歳児マニュアル』. 河原佐公編著. ひかりのくに, 1997. p10-40
- 14) 『最新保育テキストブック5〈保育実習〉』4 岡本美智子編著. 聖公会出版, 2007.
- 15) 『〈新訂第2版〉幼稚園・保育所実習の指導案はこうして立てよう』. 岡本富郎ほか著. 萌文書林, 2009. p6-16.
- 16) 『保育者のための文章作成ワークブック』. 谷川裕捻編著. 明治図書出版, 2006. p96-113.
- 17) 『気になる子どもの保育ガイドブック－はじめて発達障害のある子どもを担当する保育者のために－』. 徳田克己編著. 福村出版, 2010. p19-42.
- 18) 『保育士のための自己評価チェックリスト』 民秋言. 萌文書林, 2008. p5-13. p44-79. p177-207
- 19) 『知りたいときにすぐわかる幼稚園・保育所・児童福祉施設実習ガイド』. 石橋裕子編著：同文書院, 2011.
- 20) 『シードブック保育者論』. 榎木一二三子編著, 建帛社, 2009. p1-158.
- 21) 『子どもと保育の心理学－発達臨床と保育実践－』. 小林芳郎編著. 保育出版社, 2003.
- 22) 『キラッと光る保育者のマナー』. 神長美津子編著. ひかりのくに, 2005. p12-73
- 23) 『子ども虐待の予防とネットワーク－親子支援の対応の手引き－』. 徳永雅子著. 中央法規, 2007.
- 24) 『すぐできる！ちょこっとあそびアイデアBOOK』. 南夢未編著. ナツメ社, 2012.
- 25) 『子どもの心をつかむかんたんシアター』. 南夢未編著. ナツメ社, 2008.
- 26) 滋賀県米原市社会福祉法人大原福祉会大原保育園：<http://www.ans.co.jp/n/ohara/>
- 27) 滋賀県長浜市 社会福祉法人はのくにひよこ乳児保育園：<http://www/h-hiyoko.jp/>
- 28) 東京都台東区社会福祉法人康保会：<http://www.kouhokai.or.jp/>
- 29) 社会福祉法人四国大学福祉会四国大学附属乳児保育所：<http://www.pikara.ne.jp/nishitomida>

